木津川流域の遺跡を読み解く

【報 告 1】　奈良の都と木津川

木津川市教育委員会

大坪　州一郎　主　　任　　Ｐ１～Ｐ８

【報 告 2】　木津川流域にひろがる古代寺院

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

石井　清司　　総括主査　　Ｐ９～Ｐ 20

【報 告 3】　木津川沿いの古道と遺跡

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

村田　和弘　　主　　査　　P21 ～Ｐ 38

【ミニ討論会】

コーディネーター

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

筒井　崇史　　係　　長

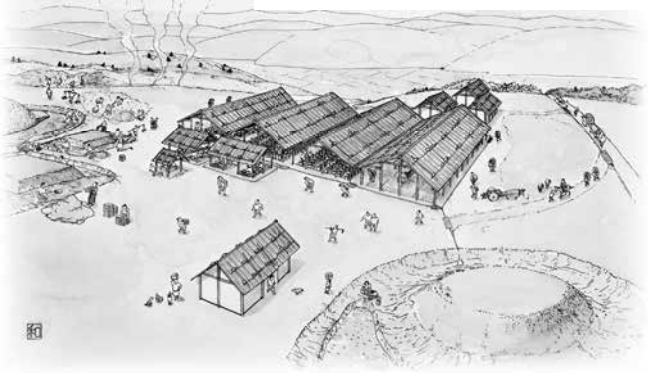
日 時：平成 30 年 2 月 24 日（土）　午後 1 時 30 分から午後 4 時 30 分

場 所：相楽会館

主 催：京都府教育委員会

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

後援：木津川市教育委員会



上人ヶ平遺跡瓦工房跡想像復原図（早川和子画）

京埋セミナー資料 No.137 － 420

奈良の都と木津川

木津川市教育委員会
大坪　州一郎　主任

１．はじめに

木津川は、南山城や伊賀と京都や大阪をつなぐ水運の要として古くから重視されてきました。『万葉集』に所収の「藤原宮の役民の作る歌」には、藤原宮に使うための木材を滋賀県大津市の田上山から切り出し、筏を組んで、宇治川まで流し下し、「泉の川」をさかのぼらせて運ぶ様子がうたわれています。この「泉の川」は木津川を示しています。運ばれた木材は、現在の木津川市木津周辺から陸揚げされ、奈良に運ばれたと思われます。この地は古代には「泉津」「泉木津」とも呼ばれ、木津川から奈良へ人やものを運ぶ港となっていました。

平城京に遷都されると、従来利用されてきた大和川の水運に比して、淀川－木津川の水運が重用されるようになり、木津川には平城京を成り立たせる建設資材や、都に貢納された各地の特産品が行き交うようになります。

２．木津川の港

木津はその名の通り、藤原京・平城京、そして南都諸寺の伽藍を建造するための木材を集積する場所でした。木材の産地としては、上述した滋賀県大津市の他、笠置町・南山城村から伊賀市一帯の山が南都諸寺の杣山であったことがわかります(『類聚三代格』)。このような産地から木材を円滑に平城京内に運び込むため、平城京遷都に伴い平城京内に移転したり、新たに建立されたりした寺院は、木津に木材調達や保管を担う施設を設けていました。これは「木屋所」と呼ばれ、８世紀後半には大安寺、薬師寺、西大寺、東大寺が木屋所を設置していたことが史料からわかっています。また、平城京から出土した木簡や正倉院文書には、「泉」「泉津」で木材や塩、海藻を求める記事や、木津から平城京へ木材を運ぶ運賃なども書かれています。

この泉津に関連する遺跡として、木津川市木津宮ノ裏で発見された上津遺跡が挙げられます。上津遺跡は奈良時代後半に営まれた遺跡で、大型の掘立柱建物や井戸などがみつかっています。特筆すべきは遺物の種類で、平城宮式軒瓦、帯金具、銭貨や墨書土器・硯、三彩陶器、祭祀のための人面墨書土器や土馬が出土しています。これら出土遺物は官

衙遺跡に顕著なもので、上津遺跡が官の施設であることを示しています。同時に平城京西市との類似性も指摘されています。この他、煮炊きの土器には山城・大和・河内・近江・伊賀・伊勢のものがみられ、各地から人やものが来ていることがわかります。近年の調査では、漆が中に付着した須恵器長頸壺が多数みつかっています。『延喜式』によると漆は東海、北陸、中国、九州の特産品とされています。このような調として都に貢納された各地の特産品は、難波から淀川・木津川をさかのぼり、木津を経て平城京に入ったと思われます。このように上津遺跡は、官が管理した各地の物資の集積所であり、市としての機能ももっていた遺跡ということができるのです。

３．木津川沿いの工房跡

南山城においても、平城京に送る製品をつくった工房がいくつかみつかっています。主なものとして瓦・須恵器・銭貨が挙げられます。

（１）瓦

木津の南側に広がる平城山丘陵には、ニュータウンの開発に伴い40か所の瓦窯が発見されており、これを奈良山瓦窯跡とよんでいます。すべての窯が平城京にある建物の屋根瓦を焼くために造られたもので、平城宮、興福寺・東大寺・法華寺などの平城京内寺院、長屋王邸など貴族の邸宅に瓦が供給されています。木津川市州見台で発見された市坂瓦窯跡では、その北側に隣接する上人ヶ平遺跡から大型の掘立柱建物や粘土採掘坑がみつかっており、窯跡と瓦工房が一体となった様子をみることができます。これらの瓦は陸路を通って平城京に人力や車を使って運ばれました。一方でこれらの瓦は、木津川市山城町高麗寺跡や城陽市平川廃寺などでも使用されています。また、長岡京遷都の際には、平城京で使用された屋根瓦を再利用していることがわかっています。木津北遺跡では、平城宮・長岡宮両方でみられる瓦が多数表採されており、長岡京遷都の際に、瓦を船で運ぼうとして川に落としたものと考えられています。

（２）須恵器

『延喜式』によれば須恵器の生産地として、和泉、摂津、山城、美濃、讃岐、播磨、備前、筑前が挙げられています。遺跡としても南山城において須恵器を焼いた窯跡が数多く発見されています。平城京に遷都された８世紀前半の窯跡としては、京田辺市多々羅マムシ谷窯跡、精華町煤谷川窯跡などが挙げられます。８世紀後半では、京田辺市松井窯跡、八幡市交野ケ原窯跡、木津川市加茂町西椚窯跡などが発掘調査されています。この他加茂町には観音寺から当尾の山中に数多くの窯跡があることが分布調査等でわかっています。これら窯跡は木津川の支流付近に営まれています。

（３）銭貨

奈良時代には「和同開珎（わどうかいちん）」の発行によって、畿内を中心に銭貨によって物や労働の対価を支払う貨幣経済が本格的に始まるとされます。銭貨の鋳造には「鋳銭司（ちゅうせんし）」という官職がおかれ、奈良時代には長門（ながと）、河内の他、平城京内にも拠点があったとされています。平安時代に木工寮に対して「山城国相楽郡岡田郷旧鋳銭司山」で銅を取らせる記事があり（『日本三代実録（にほんさんだいじつろく）』貞観（じょうがん）７(865)年）、今の木津川市加茂町内にも鋳銭司があったと考えられています。その候補が銭司（ぜず）遺跡です。過去の発掘調査で奈良時代の建物跡や炉跡がみつかっており、鞴羽口（ふいごはぐち）や坩堝（るつぼ）、銅滓（どうさい）、砥石（といし）、銭貨(和同開珎)、恭仁宮式軒瓦などが多数出土しています。

４．おわりに

平城京の遷都に伴い、難波から淀川・木津川の水運は、都と地方をつなぐ大動脈となりました。その物流の拠点として木津が注目され、平城京の外港として発展します。また、南山城には瓦や須恵器の窯など多くの工房が造られるようになり、これら製品の流通も木津川を利用したことが考えられます。

【参考文献】

・木津町『木津町史』本文編　1991

・加茂町『加茂町史』本文編

・木津町教育委員会「上津遺跡第２次調査概報」(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第３集) 1980

・木津川市教育委員会『上津遺跡第９次発掘調査報告書』 2010

・加茂町教育委員会『銭司遺跡』加茂町文化財調査報告第１集　1986

・加茂町教育委員会『西椚窯跡』加茂町文化財調査報告第２集　1981

・山田邦和「第３章　山城の須恵器生産」(精華町教育委員会・財団法人古代学協会『(仮称) 精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書』)1987

・八幡市『八幡市誌』第１巻　1986

・奈良文化財研究所『図説平城京事典』 2010

（1）『万葉集』巻一　五〇

藤原の宮の役民の作る歌

やすみしし　我が大君　高照らす　日の御子　荒栲の　藤原が上に　食す国を　見したまはむと　みあらかは　高知らさむと　神な
がら　思ほすなへに　天地も　寄りてあれこそ　石走る　近江の国の　衣手の　田上山の　真木さく　檜のつまでを　もののふの
八十宇治川に　玉藻なす　浮かべ流せれ　そを取ると　騒く御民も　家忘れ　身もたな知らず　鴨じもの　水に浮き居て　我が作る
日の御門に　知らぬ国　寄し巨勢道より　我が国は　常世にならむ　図負へる　くすしき亀も　新代と　泉の川に　持ち越せる
真木のつまでを　百足らず　筏に作り　泝すらむ　いそはく見れば　神からにあらし

右は、日本紀には「朱鳥の七年癸巳に秋の八月に藤原の宮地に幸す。八年甲午
春の正月に藤原の宮に幸す。冬の十二月庚戌の朔の乙卯に藤原の宮に遷る」といふ。

（2）『万葉集』巻十二　二六四五

物に寄せて思を陳ぶ

宮材引く　泉の杣に　立つ民の　息ふ時無く　恋ひわたるかも

（3）「大安寺伽藍縁起流記資材帳」

一泉木屋并薗地二町　東大路　西薬師寺木屋　南自井一段許退於北大河之限

（4）「造仏所作物帳」

買檜久礼千二百八十枚七百卌枚各十一文五百卌枚各十文直銭十三貫五百卌枚

自泉津運車六十四両賃銭二貫卌八文車別卅二文

（5）「奉写二部大般若経科雑物出納帳」

塩

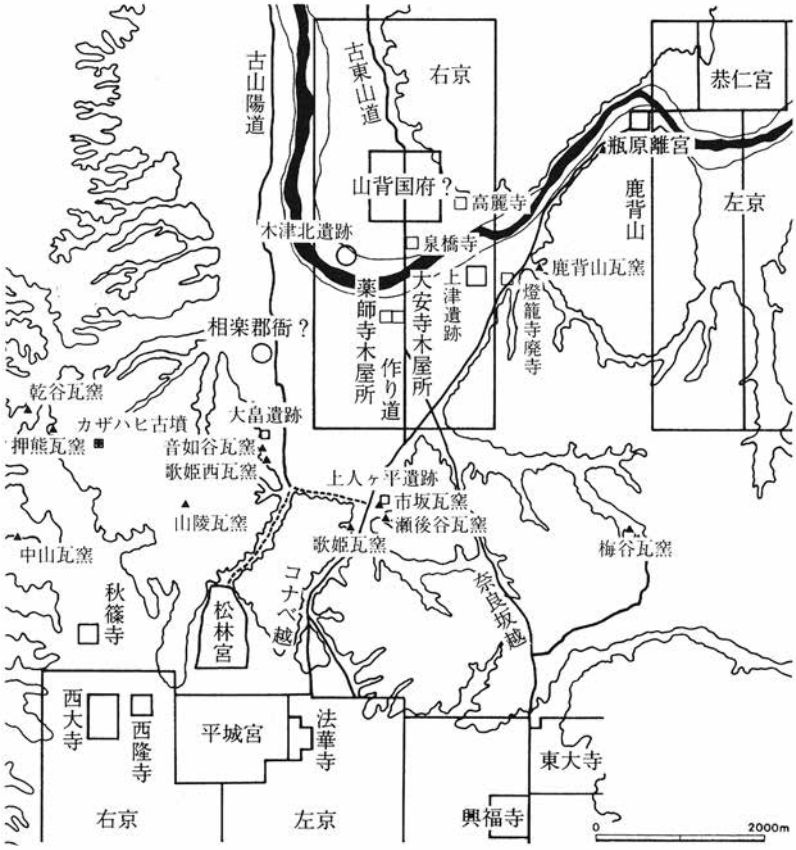
十日収納玖課淡路片　　滑海藻拾壱束員五十一結

若滑海藻拾束員五十結

右、附泉木屋領山辺武羽、買検納如件、

主典安都宿祢　　案主上馬養

下「道主」

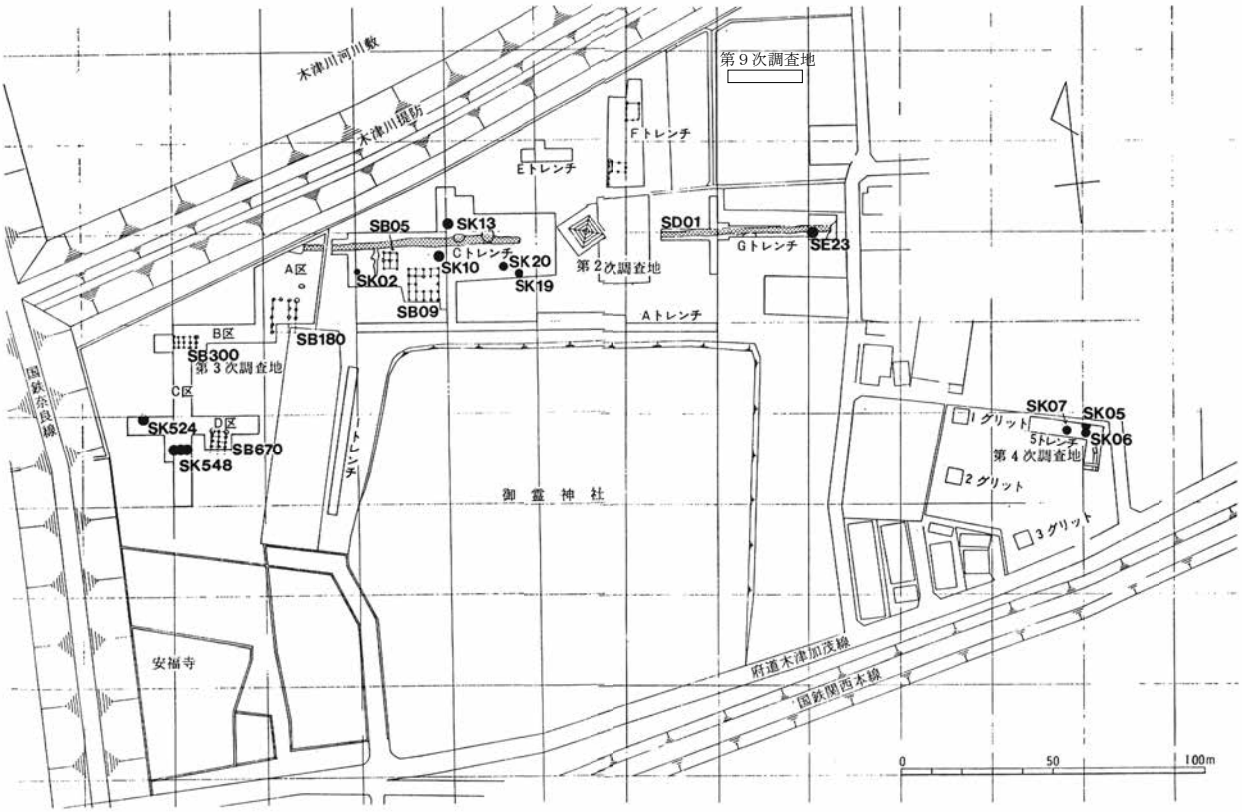


第１図　泉津付近の遺跡（『木津町史』本文編）

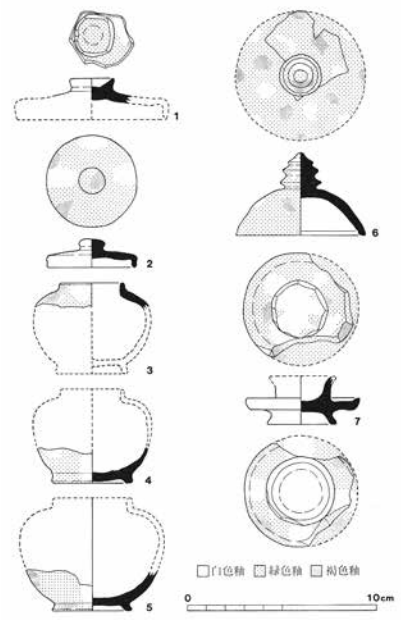
「付宿奈麻呂」

「・泉進□〔上カ〕材十二条中　桁一条又八条□

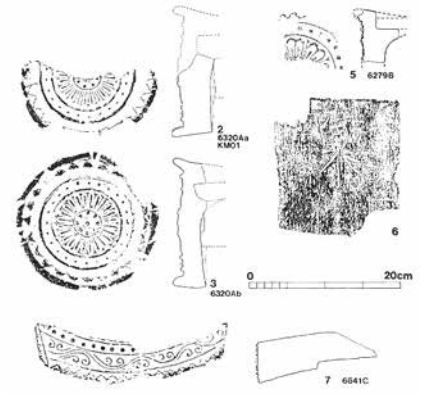
第２図　平城宮跡出土木簡
（奈良文化財研究所木簡データベース
http://mokuren.nabunken.go.jp）



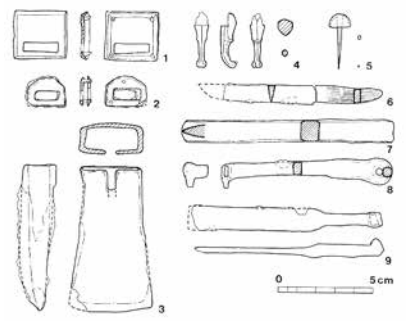
第３図　上津遺跡主要遺跡平面図



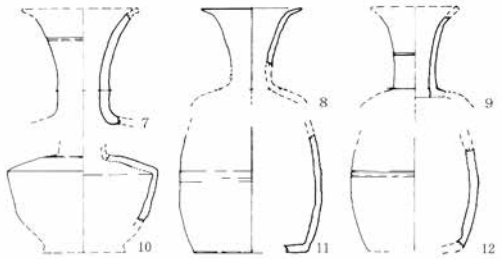
三彩陶器



瓦類

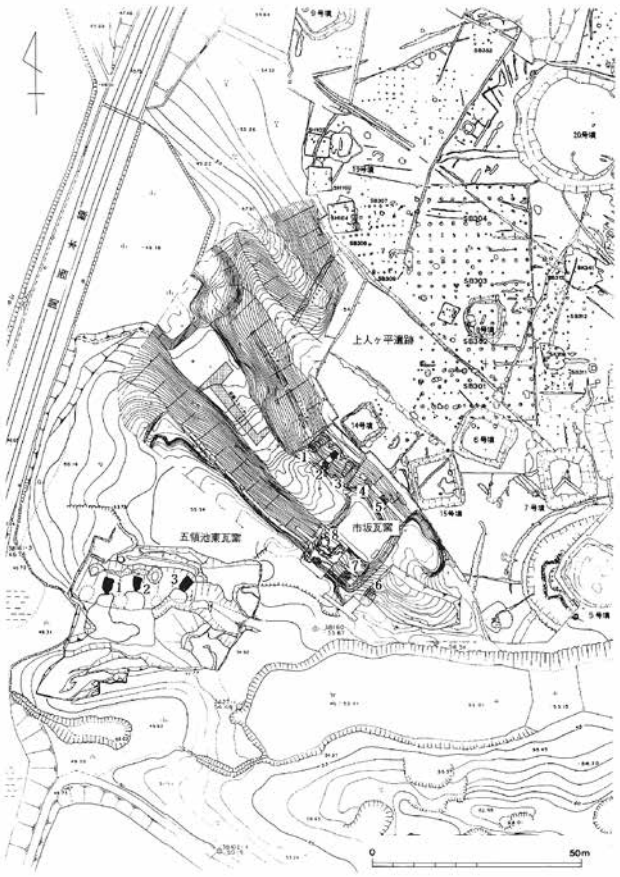


金属製品

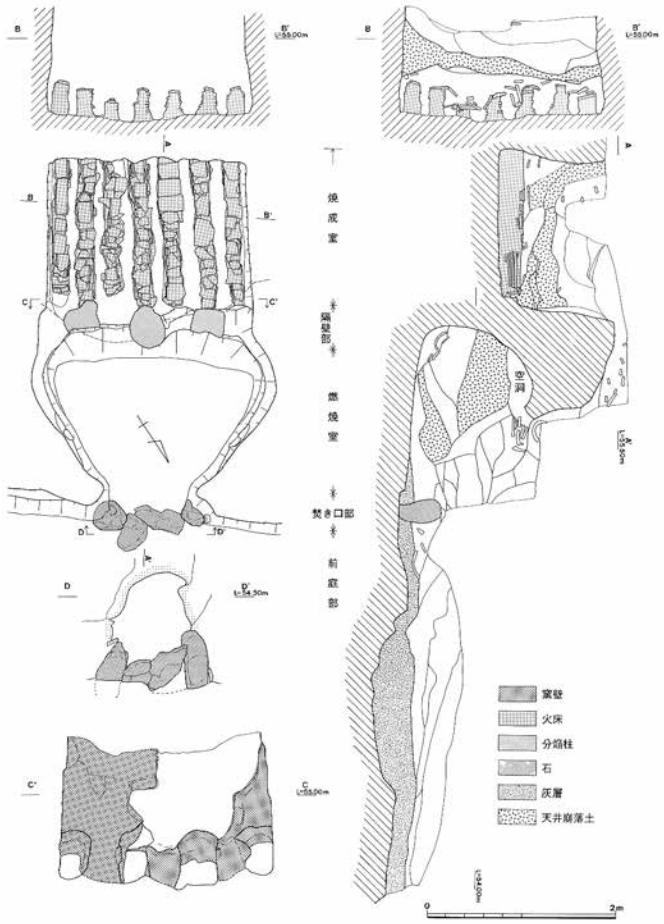


須恵器長頸壺（漆付き）

第４図　上津遺跡出土遺物実測図

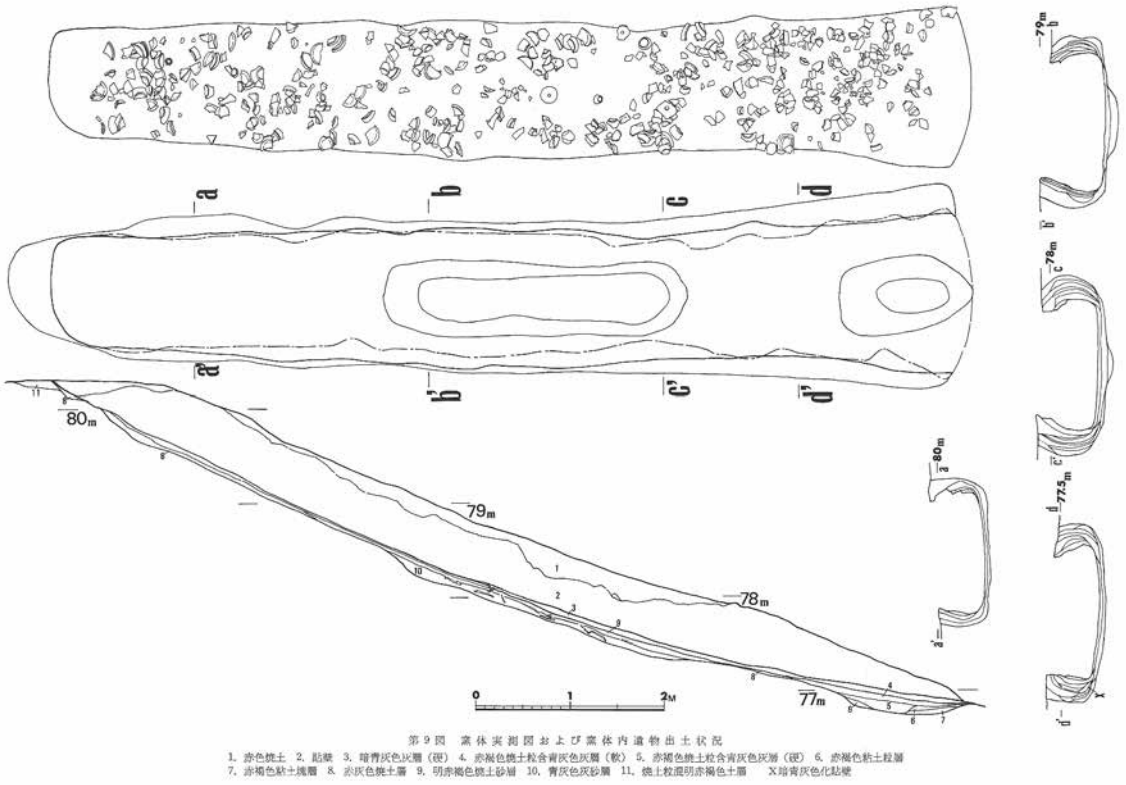


第５図　市坂瓦窯跡・上人ヶ平遺跡平面図

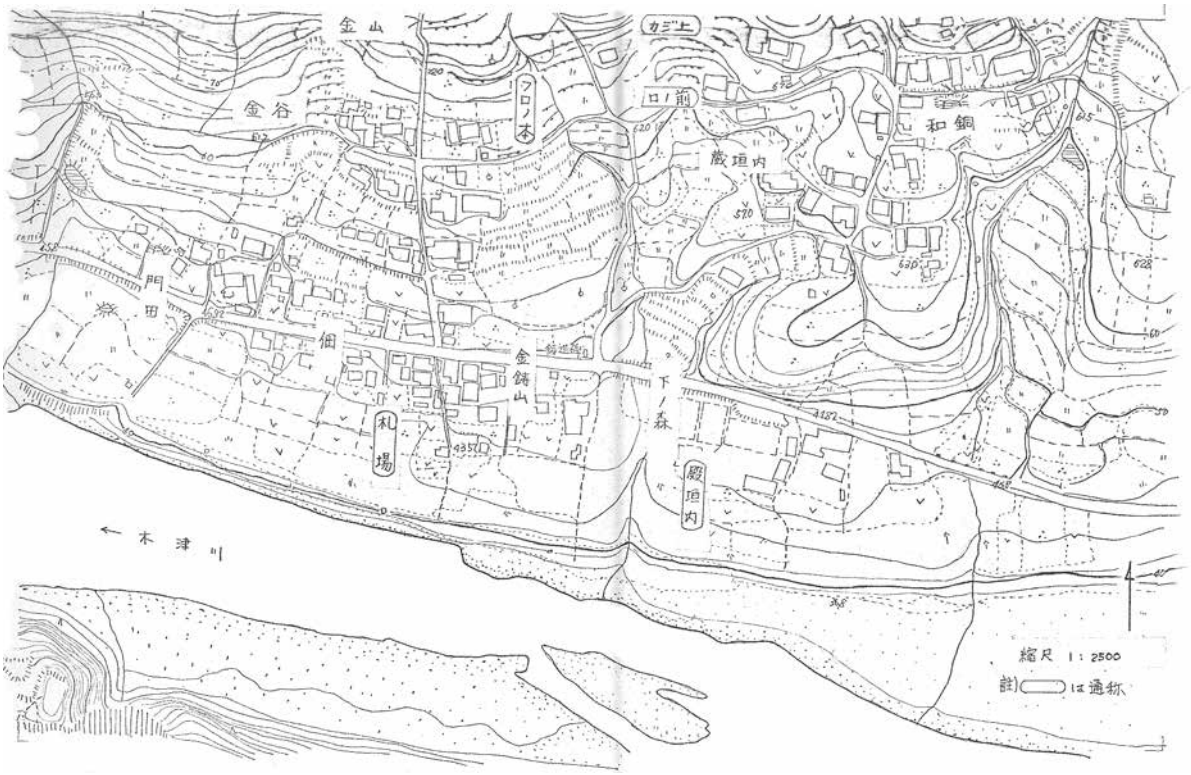


第６図　市坂瓦窯跡８号窯測量図

第７図　南山城の窯跡分布図（山田邦和1987）



第８図　西椚窯跡測量図



第９図　銭司遺跡周辺地図

京埋セミナー資料 No.137 － 422

木津川流域にひろがる古代寺院

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
石井　清司　総括主査

１．地方寺院造営の背景

588年、百済から仏舎利がもたらされ、日本で最初の本格的寺院である飛鳥寺の造営が開始されました。この時に寺院の建設にかかわる技術者も渡来しています。

仏教は最初、蘇我氏などの有力豪族に受け入れられましたが、徐々に天皇家・皇族にも受け入れられ、推古２(594)年に皇太子・大臣に「三宝(仏・仏法・僧)を興し隆えしむ。(中略)各君親の恩の為に競ひて仏舎を造る。即ち是を寺と謂ふ」(三宝興隆の詔)とあり、仏教が全面的に受容されたと言われています。650年頃には天智天皇の発願で川原寺が建てられます。天智天皇の死後、壬申の乱(672年)で勝利した天武天皇は、中央集権国家体制を強力に推し進めようとしたようで、これまでの飛鳥地域を離れて本格的な都城である藤原京の造営を計画します。この藤原京では大官大寺・本薬師寺が、その次の平城京では大安寺・薬師寺・興福寺・東大寺などの大寺院が造営されます。地方でも都における寺院の造営に連動するように、郡司に任命された地方豪族を中心に寺院の造営がさかんになります。

２．寺院造営技術者の渡来

寺院には、高層の塔、本尊を安置する金堂などがあります。これまでの竪穴建物や掘立柱建物などとは異なった建物で、屋根には瓦が使用されています。このため、飛鳥寺の造営にあたっては僧侶のほか、寺工・露盤博士・瓦博士・画工などの技術者が百済から派遣されました。

この頃の朝鮮半島は、高句麗・百済・新羅の三国時代といわれており、日本は三国と交流を深めていました。ただ、動乱の時代でもあり、660年に百済が唐・新羅の連合軍によって滅亡します。また、668年には高句麗も滅亡し、676年に新羅一国に統一されます(第２図)。

この動乱の中で、百済・高句麗・新羅の知識人・技術者が日本にたくさん渡来し、日本国をささえるとともに、渡来系氏族として中央集権国家体制の整備に協力していきます。

３．仏教政策と寺院

仏教は釈迦の教えを中心として、その教えを実践する施設として寺院があります。寺院には塔・金堂などの仏を祭る空間＝仏地（塔院）と僧侶などの共同空間＝僧地（僧院）で構成されています。仏地にある塔・金堂・講堂などの配置をみていくと、塔を中心にした配置から金堂を中心とした配置になるようです（第１図）。

寺を経営する壇越の違いから国家が造営した官寺と蘇我氏や藤原氏、渡来系などの氏族が造営した氏寺があります。

今回紹介する南山城地域の古代寺院は、山背国分寺などの国司・郡司が経営する官寺と高麗寺跡のような氏寺がありますが、大半の寺院の経営主体はわかっていません。ただ、建物・回廊などに使われた軒瓦は、その文様の構成から核となる大寺院とのネットワークを想像することができ、寺院の創建・修理・再建時期などを知ることができます。

４．木津川流域の古代寺院のようす

木津川流域（南山城地域）での古代寺院をまとめた冊子（同志社大学歴史資料館『南山城の古代寺院』）には22の寺院が紹介されています。これは考古学や発掘調査の成果を中心にまとめられたもので、塔・金堂などの遺構、瓦・仏教的遺物の出土から古代寺院跡と想定されています。

表２のように、相楽郡では10寺、久世郡では５寺、綴喜郡では７寺が紹介されています。藤原京以前の飛鳥時代（７世紀代）に存在した可能性がある寺院は18例を数え、京都府内の丹後・丹波地域に比べて多くの寺院が造営されています。

最初に造営されたのは木津川市高麗寺跡（第５図）のようです。高麗寺跡は地名や文献から渡来系豪族である狛氏に関わる寺院であり、飛鳥寺に飾られた軒丸瓦に似た文様の軒丸瓦が出土していますが、伽藍の整備は７世紀後半と思われます。

この時代の軒瓦の文様からみたネットワークを想定すると、相楽郡・久世郡の寺院は川原寺に使われた軒瓦に似た複弁蓮華文のものを多く使用しており、綴喜郡の志水廃寺・美濃山廃寺では枚方市にある九頭神廃寺と同じ瓦が出土しています（表４）。

寺院の主要建物は、一般的に造られてから60年程度で修理が必要であり、300年程度で大修理（再建）が必要になります。

７世紀代（飛鳥･白鳳時代）に建てられた南山城地域の寺院も奈良時代（８世紀）には、塔･金堂などの修理がなされたようで、修理に使われた軒瓦には平城宮式軒瓦が使われていることから､南山城地域の寺院と国との関係は密接であったと思われます。特に､天平12（740）年、聖武天皇は、平城宮から恭仁宮に都を遷されますが、この時に南山城地域の寺院の多

くは再整備されたようで、恭仁宮造営に使われた軒瓦の多くが南山城の寺院で使用されています。

国分寺建立の詔（天平13（741）年）以降、恭仁宮から平城京へ聖武天皇はもどり（平城京還都：天平17（745）年）、恭仁宮の大極殿は山背国分寺の金堂として使用されますが、山背国分寺で後世補修に使われた軒瓦と同じ文様のものが南山城地域の寺院で使われています。また、綴喜郡にあった志水廃寺・美濃山廃寺では百済王族の末裔が建立した百済寺（枚方市）と同じ軒瓦も使われています。

平城京から長岡京（784年～）・平安京（794年～）へと桓武天皇は都を遷します。この間、延暦10（791）年には、山背国の寺院の修理（「山背国の浮図修理令」）を命じますが、その実態は明らかでなく、出土軒瓦からみるかぎり、寺院の修理が盛んであったようには思われません。これまでの都の玄関口としての南山城地域としての役割はおわり、飛鳥時代から続いた寺院の多くは平安時代以降、廃絶していったと思われます。

５．おわりに

木津川流域の古代寺院は、創建当初の飛鳥時代には草舎のような小規模な寺院が点在したようで、藤原京の時代に規模が拡大したようです。軒瓦からみると、相楽郡では、川原寺式につながる高麗寺式が広く分布しています。久世郡では、山田寺式や川原寺式などが出土しており、大和の大寺院とのつながりを想定することができます。これに対して、綴喜郡では大阪府枚方市の寺院と結びつくものがあるなど独自の在地色を展開しています。それが渡来人を含む氏族との関係を表しているのかもしれません。

小規模寺院は、奈良時代になって荘厳な寺院建築として再建されたようです。「山背」国には「背」の文字が用いられていますが、これは都のの玄関口としての機能が南山城地域にあったことを示しており、奈良時代の仏教政策を体現する形で寺院が再建されたと思われ、国が大きく関与した結果と考えられます。ただ、政権が変わり桓武天皇の平安京遷都とともに南山城地域は都への玄関口という役割を終え、寺院も衰退していったものと思われます。

【用語解説】

壇越･･･寺院や僧侶に金品を贈与する信者のこと。

表１　寺院関連年表

欽明７(538)年	百済聖明王が仏像･経典を献じる(『上宮記』･『日本書紀』は552年)
欽明13(552)年	仏像礼拝をめぐる蘇我稲目と物部尾輿が対立
敏達14(585)年	疫病が流行し、物部守屋らが寺を壊し、仏像を捨てる
崇峻元(588)年	百済から仏舎利が献ぜられ、同時に僧侶・寺工・露盤(ろばん)博士・瓦博士・画工が渡来。飛鳥寺造営着工
推古２(594)年	三宝興隆の詔
推古４(596)年	飛鳥寺完成(着工から８年後)
推古15(607)年	遣隋使の派遣
推古26(618)年	隋が滅び、唐がおこる
推古32(624)年	46か所の仏寺が存在
舒明２(630)年	遣唐使の派遣
舒明11(639)年	百済川のほとりに大宮と大寺を造営
皇極２(643)年	乙巳の変により蘇我本宗家が滅ぶ
天武元(672)年	壬申の乱
天武５(676)年	使いを諸国に発し、護国経典(金光明経・仁王経)を説かせる
天武14(685)年	諸国に仏舎をつくり、仏像・経典をおかせる
持統６(692)年	天下諸寺　凡515寺
持統６(694)年	藤原京遷都
慶雲３(710)年	平城京遷都(元明天皇)
天平12(740)年	恭仁京遷都(聖武天皇)
天平13(741)年	国分寺造営の詔
天平15(743)年	大仏建立の詔
天平勝宝元(749)年	聖武天皇が譲位し、孝謙天皇が即位
天平勝宝４(752)年	東大寺大仏開眼供養
天平勝宝８(764)年	恵美押勝の乱で道鏡排斥(はいせき)に失敗。道鏡は大臣禅師に 孝謙上皇は淳仁天皇を排し、称徳天皇として即位(重祚)
宝亀元(770)年	称徳天皇崩御。光仁天皇即位。道鏡を左遷
天応元(781)年	桓武天皇即位
延暦３(784)年	長岡京遷都
延暦10(791)年	山背国の浮図(ふと：ほとけ・僧侶)修理令
延暦13(794)年	平安京遷都

表２　山城の古代寺院一覧

	郡名	遺跡名	所在地	創建時期	寺域の広さ	想定氏族	その他
1	相楽郡	高麗寺跡	木津川市山城町上狛高麗寺	７世紀初頭で 12 世紀以降は不明。	東西約 190 m・南北約 180 m	狛（高麗）氏の氏寺	国史跡
2		蟹満寺	木津川市山城町綺田浜	７世紀後半	方二町	綺氏あるいは狛氏・秦氏	
3		井手寺跡	綴喜郡井手町井手	８世紀後半		井手左大臣橘諸兄	
4		山背国分寺跡	木津川市加茂町例幣	恭仁宮廃絶以降、国分寺として施入	東西約 273 m・南北約 330 m	国司	国史跡
5		神雄寺跡	木津川市木津天神山	８世紀後半		橘諸兄か	
6		泉橋寺	木津川市山城町上狛西下	不明	不明		
7		燈籠寺廃寺	木津川市木津宮ノ裏	不明	不明		
8		松尾廃寺	木津川市山城町椿井松尾		詳細不明		
9		里廃寺	精華町下狛	７世紀後半	方一町か	狛氏か	
10		下狛廃寺	精華町下狛	７世紀後半			
11	久世郡	久世廃寺	城陽市久世芝ヶ原	７世紀後半	東西約 120 m、南北約 135 m	栗隈氏か	
12		平川廃寺	城陽市平川古宮	７世紀後半	東西約 175 m、南北 115 m	黄文氏か	
13		広野廃寺	宇治市広野朝東裏	７世紀後半	方一町		
14		正道廃寺	城陽市寺田正道				
15		山瀧寺跡	宇治田原町岩山				
16	綴喜郡	興戸廃寺	京田辺市興戸				
17		三山木廃寺	京田辺市宮津				
18		普賢寺	京田辺市普賢寺				
19		興戸廃寺	京田辺市興戸		不明		
20		西山廃寺	八幡市西山和気	８世紀後半			
21		志水廃寺	八幡市八幡月夜田	７世紀末頃	東西 120 m以内		
22		美濃山廃寺	八幡市美濃山古寺				

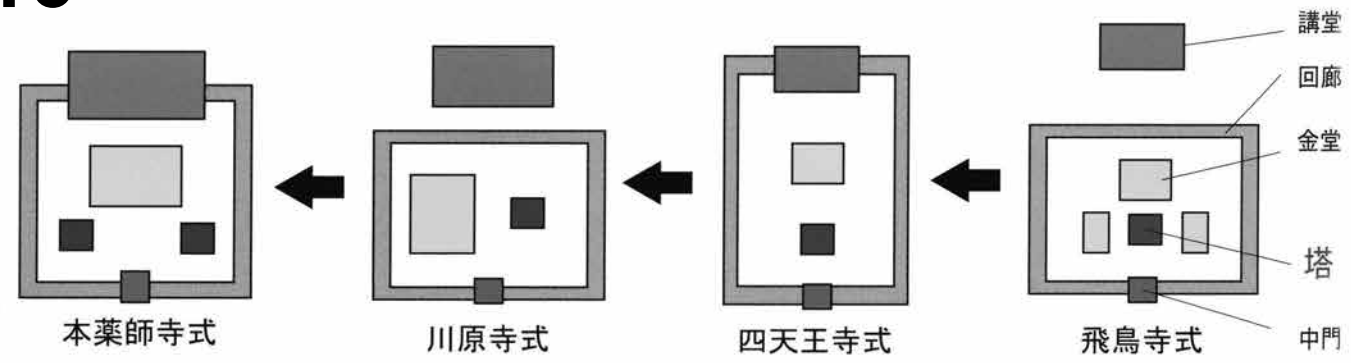
表３　仏地(塔院)主要建物一覧

	遺跡名	造営時期	想定建物の名称	基壇規模	建物規模
1	高麗寺跡	７世紀後半	塔	一辺 12.7 m（瓦積基壇）、高さ 1.5 m	礎石建物
			金堂	東西 16.0 m、南北 13.4 m、高さ 1.2m	礎石建物で桁行七尺・七尺・七尺、梁間 12.5 尺・12.5 尺の身舎の四面に８尺の庇
			講堂	東西 23.7、南北 19.5 m、高さ 0.6 m	桁行 13 尺・13 尺・13 尺、梁間 12.5 尺・12.5 尺の身舎の四面に 13 尺幅の庇が
2	蟹満寺	７世紀後半	金堂	上下二段で、下段の南北 17.8 m、上段の南北 17.2 m。東西規模は不明	
3	井手寺跡	８世紀後半	金堂	ＳＢ 201	
				ＳＢ 501	
				ＳＢ 502	
4	山背国分寺跡	８世紀後半	塔	一辺 17 m、高さ 1.2 mで、礎石痕より方 9.8 m）	
			金堂	金堂恭仁宮大極殿を転用、東西 53.1 m、南北 28.2 m、高さ約 1.5 m	
5	神雄寺跡	８世紀前半	本堂跡		桁行 16.5 尺（4.9 m）、梁間 15.0 尺（4.5 m）
			礼堂		桁行３間、梁間２間の身舎に南・東に庇をもつ
9	里廃寺	７世紀後半		南北 14 mと想定	
11	久世廃寺	７世紀前半	塔	13 m程度か、高さ１m程度	
			金堂	東西 26.7 m、南北 21.3 m	
			講堂	東西 23.5 m、南北 13.0 m、高さ 0.2 m	
12	平川廃寺	７世紀後半	塔	一辺 17.2 m、高さ 0.5 m	上面に四天柱２箇所、側柱 10 箇所の礎石据付跡あり
			金堂	東西 22m、南北 19.5 m、高さ 0.7 m	
20	西山廃寺	９世紀初頭	塔	一辺 10	上面に四天柱礎石が２個、側柱礎石が 10 個
			堂	10 m四方	桁行３間、梁間３間の方形
21	志水廃寺	７世紀後半		基壇の北西隅のみ確認	
22	美濃山廃寺	７世紀後半	金堂相当建物（８世紀後半）	基壇の有無は不明	ＳＢ 2020 桁行６間（21.2 m）以上、梁間２間（5.1 m）で、南北に庇１間（2.6m）をもつ礎石・掘立柱併用建物

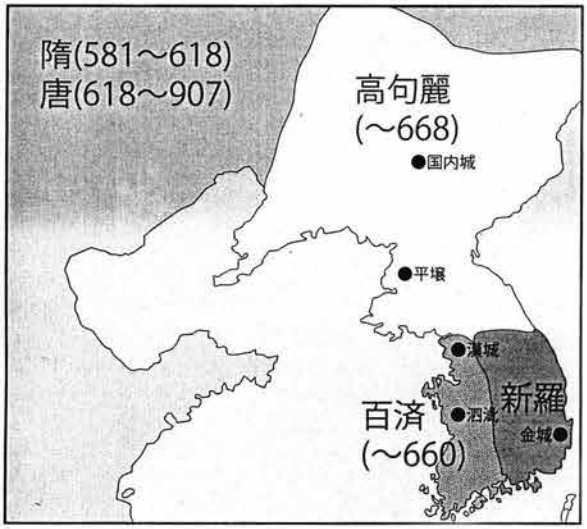
表４　山城の古代寺院出土の主な軒瓦一覧

	遺跡名	７世紀			８世紀		
				740 年恭仁京遷都	746 年以降山背国分寺造営	784 年長岡京遷都以後	
1	高麗寺跡	●飛	●川・高	●平・恭	●平・山２	●	塼仏・鴟尾
2	蟹満寺		●高・紀	●平・恭	●平・山２		
3	井手寺跡			●平	●平	●山２	
4	山背国分寺跡				●平	●	
5	神雄寺跡			●平	●平		塑像・塼仏・鬼瓦
6	泉橋寺		●高	●平			
7	燈籠寺廃寺		●（素弁）		●平・山２		「造寺」墨書土器
8	松尾廃寺		●高	●平			
9	里廃寺		●高	●平	●平		鴟尾
10	下狛廃寺		●高				
11	久世廃寺		●久・川	●平	●平・山２	●	銅造誕生釈迦仏立像・塼仏
12	平川廃寺		●山・川・高	●平・恭	●平	●	塑像・鬼瓦
13	広野廃寺		●川	●平	●平		
14	正道廃寺	●飛	●山・川	●平	●平		塼仏・鬼瓦
15	山瀧寺跡		●山・川		●平・山２		
16	興戸廃寺			●平	●平・山２	●	鬼瓦
17	三山木廃寺		●	●平	●平		鬼瓦
18	普賢寺		●川	●平	●平	●山２	
19	西山廃寺			●久	●百	●	鬼瓦
20	志水廃寺		●	●平・久		●山２	鴟尾・鬼瓦
21	美濃山廃寺		●九	●久	●百	●山２	塼仏・鴟尾・鬼瓦

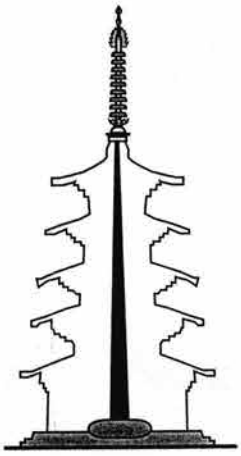
飛＝飛鳥寺式軒丸瓦　川＝川原寺式軒丸瓦　高＝高麗寺式軒丸瓦
紀＝紀寺式軒丸瓦　山＝山田寺軒丸瓦　久＝久米寺式軒丸瓦
九＝九頭神廃寺式軒丸瓦　恭＝恭仁京式軒瓦　山２＝山背国分寺式軒瓦
平＝平城宮式軒瓦
百＝百済寺式



第１図　７世紀の伽藍の変遷

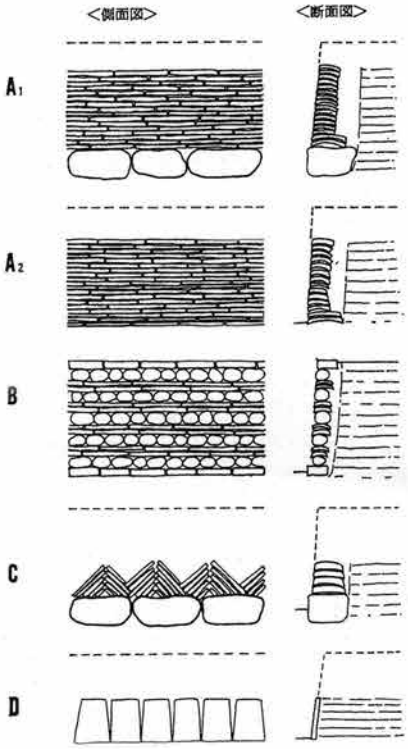


第２図　７・８世紀の朝鮮半島



基壇上に据える

第３図　塔の基壇と心礎



第４図　瓦積基壇の形式

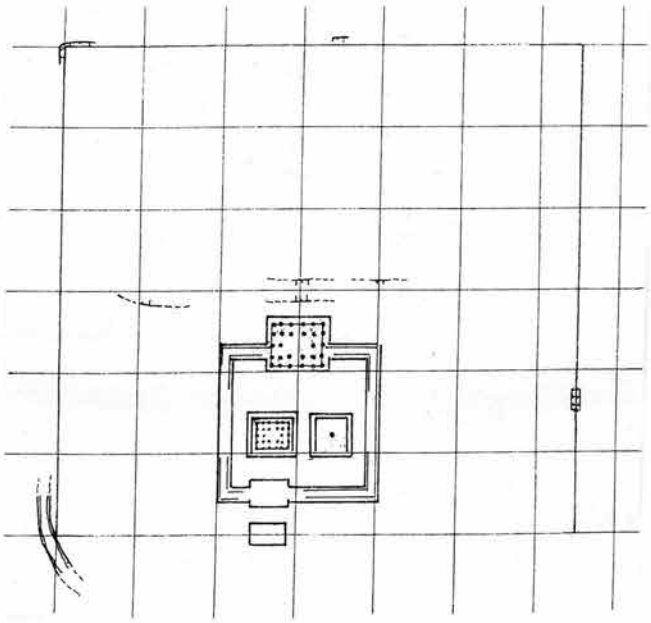
第５図　高麗寺の伽藍復元図

図面転載

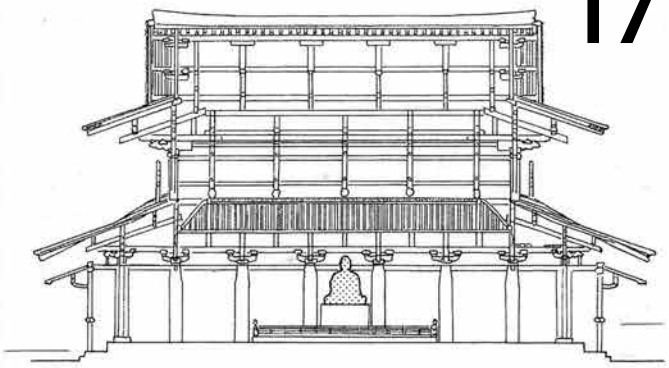
第１・第２・第３図　狭山池博物館『蓮華の花咲く風景』

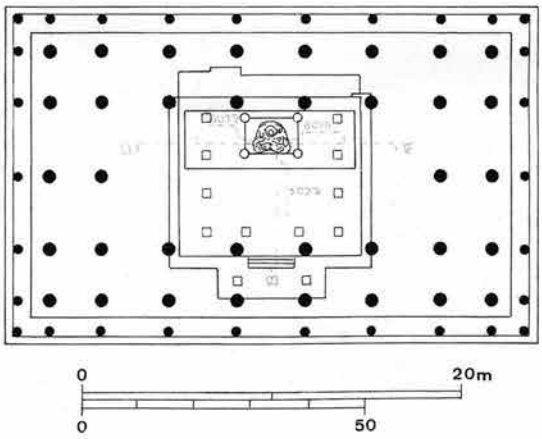
第３図　辻本和美「南山背の古代寺院と瓦積基壇」

第４図　同志社大学歴史資料館『南山城の古代寺院』

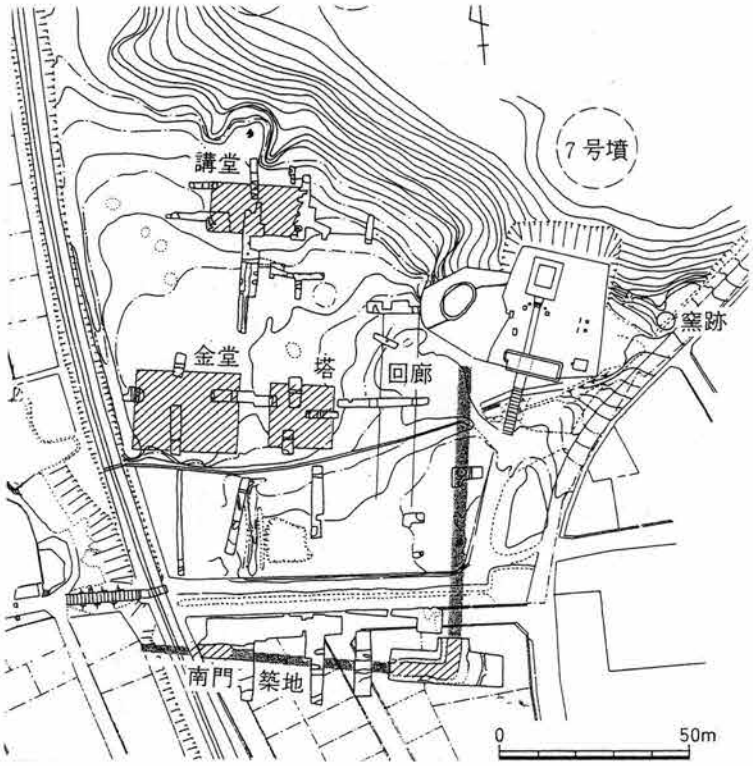


第６図　高麗寺跡伽藍配置図

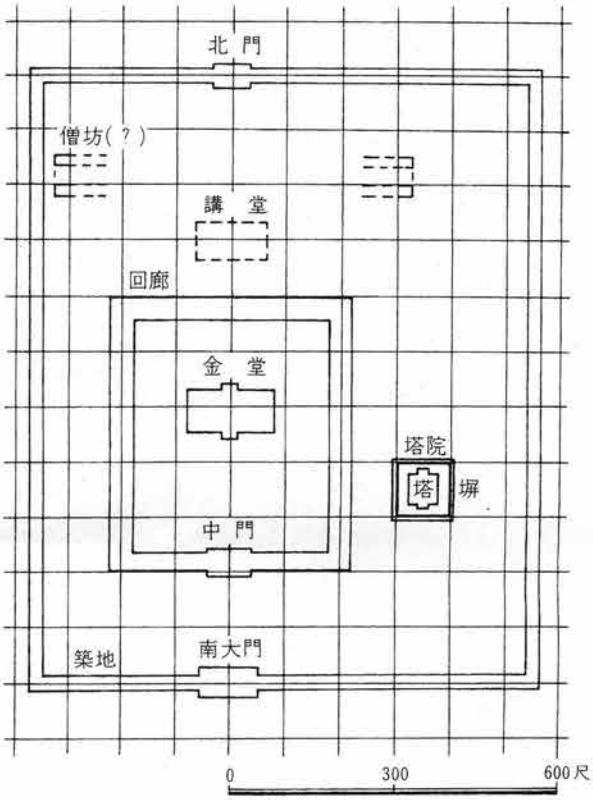




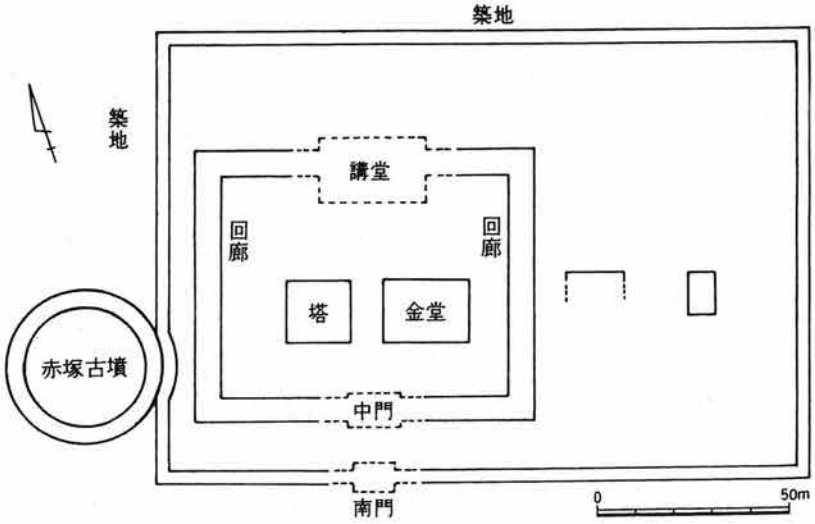
第７図　蟹満寺金堂建物復元図



第８図　平川廃寺伽藍配置図



第10図　山背国分寺跡伽藍図

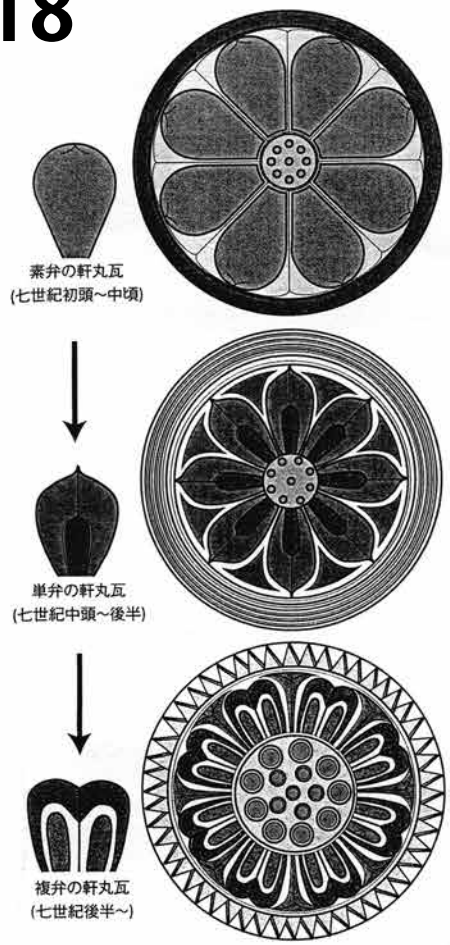


第９図　久世廃寺伽藍配置図

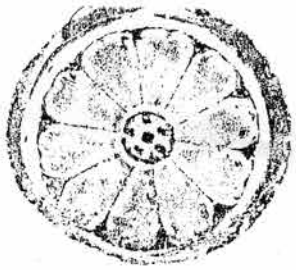
図面転載

第６図・第７図・第８図・第９図・第10図

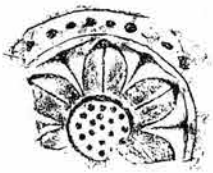
同志社大学歴史資料館『南山城の古代寺院』

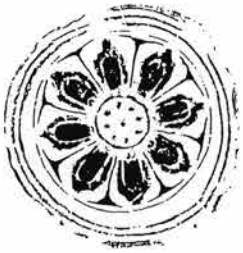


第11図
7世紀代の軒丸瓦の文様



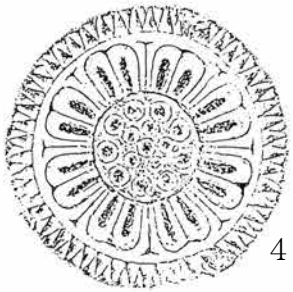
1、飛鳥寺式



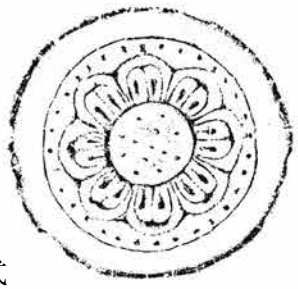


2、山田寺式

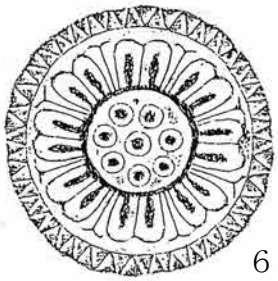
3、久米寺式



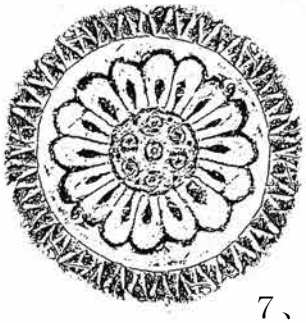
4、川原寺式



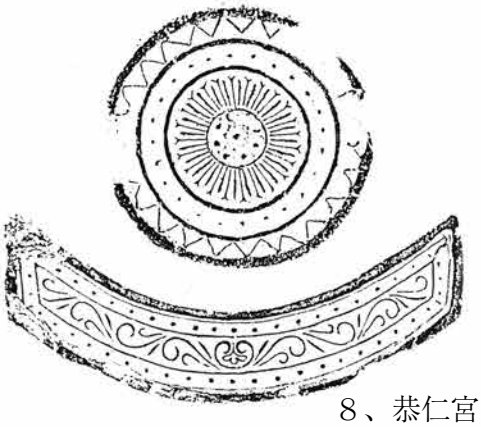
5、久米寺式



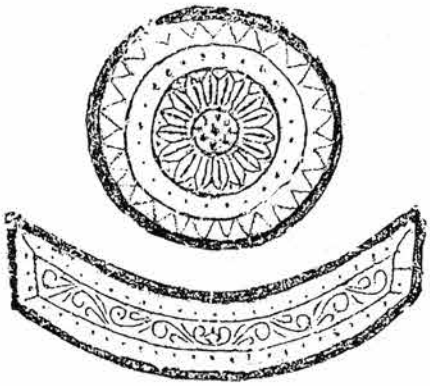
6、高麗寺式



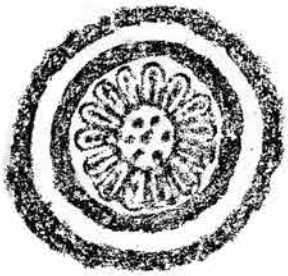
7、高麗寺式



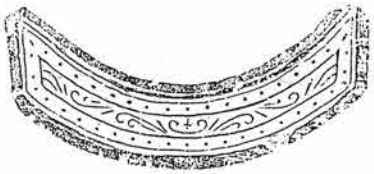
8、恭仁宮式



9、山背国分寺式



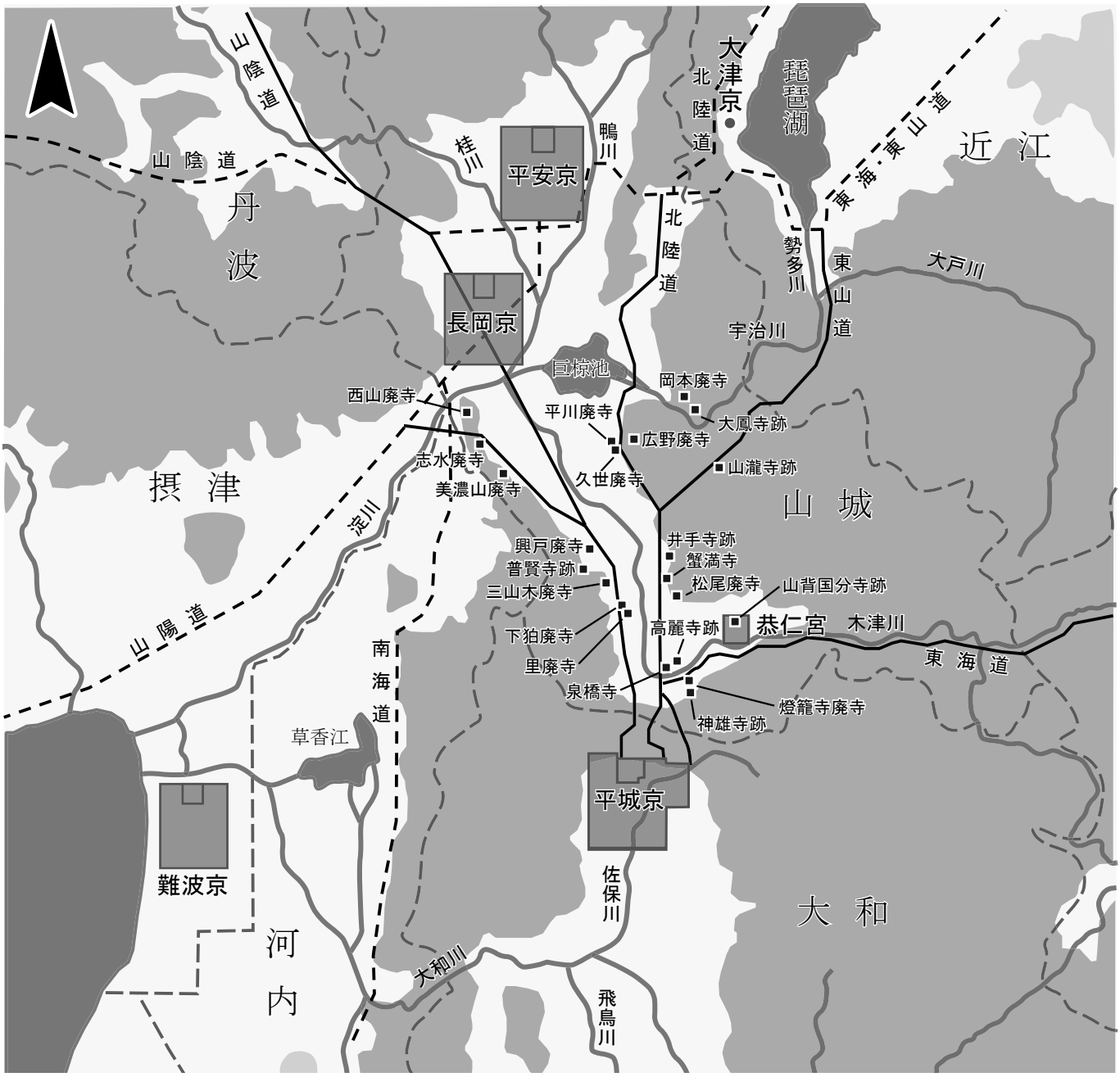
10、百済寺式



11、平城宮式

図面転載
第 11 図　狭山池博物館『蓮華の花咲く風景』
第 12 図　同志社大学歴史資料館『南山城の古代寺院』
上原真人『恭仁宮跡発掘調査報告瓦編』

第12図　木津川流域の主な軒瓦



- - - : 平安時代の古道

——— : 奈良時代の古道

■ : 主な古代寺院

0 20km

第13図　主な古代寺院

メモ

京埋セミナー資料 No.137 － 423

木津川沿いの古道と遺跡

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
村田　和弘　主査

１．はじめに

古代において、現在の府・市・郡に相当する行政区分がありました。平安時代に編さんされた『延喜式』によると京都府は山城国・丹波国・丹後国に区分されています。山城国は京都府の南部にあたり、「大国」と規定されていました。山城国には葛野郡・愛宕郡・乙訓郡・宇治郡・久世郡・綴喜郡・相楽郡があり、今回のテーマである木津川流域は、山城国の南半部（久世郡・綴喜郡・相楽郡）に相当し、「南山城地域」と呼ばれています。山城国は桓武天皇が平安京に遷都した際に「山城」国と改称されたもので、奈良時代には「山背」、さらにその前には「山代」と表記されていました。

今回は木津川流域である南山城地域に通っていた古道（官道）といくつかの遺跡から、水路・陸路との関係性やその重要性を明らかにしたいと思います。

２．官道とは

古代日本の中央政府が飛鳥時代から平安時代前期にかけて計画的に整備・建設した道路または道路網を「官道」と呼びます。

日本では、中国の制度に倣って律令制を取り入れ、中央集権的な国家を目指しました。戸籍を作って国民個人を掌握し、税を徴収するなどの業務を円滑に行うため、地方行政機関を整備するとともに、それら地方と都を結ぶ官道が敷設されました。官道は、物資や情報・命令ができるだけ早く伝わるよう、最短距離になるように敷設され、その距離を縮める工夫としてできる限り直線的に計画されました。

７世紀初頭の奈良盆地で敷設されはじめ、７世紀中期ごろに全国的な整備が進んでいきました。そして、８世紀末～９世紀初頭（平安時代初頭）の行政改革により次第に衰退し始め、10世紀末～11世紀初頭に廃絶しました。

道路のことが文献上で明らかになる最初は、大化２（646）年の改新の詔勅にある以下の記述です。

『初めて京師を修め、畿内国司・郡司・関塞・斥候・防人・駅家・伝馬を置き、及び鈴契を造り、山河を定めよ』（『日本書紀』大化二年正月甲子条、官制の交通路の設

置を指令したもの）

３.五畿（畿内）七道

五畿七道とは律令制における広域行政区画のことです。

中国では古くから天子のいる都を畿と称し、その周辺地を畿内と呼びました。

日本では五畿（畿内）は山城・大和・河内・和泉・摂津の都周辺の５か国をさします。七道とは都から地方にのびる７つの官道に沿った国々を区分したもので、東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道をさします。これらに国府を連ねて官道（駅路）が設けられ，その間に駅家が置かれました。西海道は大宰府が特別の機能をもち、九州全域を統括していました。

官道は、都から本州と四国・九州の66国２島すべてに達し、その道幅は奈良時代には12ｍ、平安時代には６ｍを基本とした壮大なネットワークでした。その長さは約6,300kmあり、約16kmごとに駅家が置かれました。全国で約400の駅家があり、５～20疋の駅馬が置かれていました。

古代の交通制度である駅制のもと、駅路は五畿七道のうち山陽道と西海道の一部（都から大宰府）を**大路**、東海道・東山道の主道を**中路**、その他を**小路**と三段階に分けられています。この官道の区分により駅家に設置する馬の数が異なります。（『養老・廐牧令』の諸道置駅馬条など）

駅路は、中央と地方の間の物資の移動や情報伝達のためのハイウェイとして位置づけられていました。しかし、直線的で広い幅員の道路には、ほかの性格も与えられていたと考えられています。一つは、外国の賓客に見せるためのデモンストレーションの場だったとする見方です。外国からの使者が特に往来する山陽道は大路とされ、他の駅路より広い道路幅を持つとともに、多くの駅馬と瓦葺きの駅家を備えていました。このように国威を外国に示すための役割も負っていたのではないかと思われます。また、中路や小路の官道では、を外国使節が通過したわけではなく、地域の豪族・住民らへのデモンストレーションだったとする見方もあります。在地の経済力・技術力では建設し得ない規模の道路の存在が、中央政府の強大な権威を誇示する役割を担っていたとも考えられます。さらに、軍用道路としての性格を唱える見方もあります。律令において、駅伝制は兵部省の所管となっており、飛鳥時代から奈良時代にかけて行われた軍事活動のために駅路などが整備された可能性もあります。

古代道路は、地域計画の基準線となることもありました。平野部での条里が駅路を基準に設定されていたり、駅路が国境となる例もあります（摂津・河内・和泉国境など）。また、国府や国分寺などの位置関係が駅路を基準として決定されたと思われる事例も多くあります。

表１　五畿(畿内)七道と旧国名

五畿 (畿内)	大和・山城・摂津・河内・和泉	奈良県、京都府中南部、大阪府、兵庫県南東部		
七道	旧国名	現在の行政地域	ランク	馬数
東海道	常陸、安房、上総、下総、武蔵、相模、遠江、甲斐、駿河、尾張、参河、伊勢、志摩	茨城、千葉、埼玉、東京、神奈川、山梨、静岡、愛知、三重（熊野地方を除く）	中路	10 疋
東山道	陸奥、出羽、上野、下野、信濃、美濃、飛騨、近江	青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島の東北６県と、栃木、群馬、長野、岐阜、滋賀	中路	10 疋
北陸道	越後、越中、佐渡、加賀、能登、若狭、越前	新潟、富山、石川、福井	小路	５疋
山陰道	丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見	京都府北部と兵庫県北部、鳥取、島根	小路	５疋
山陽道	播磨、備前、備中、備後、安芸、周防、長門	兵庫県南部、岡山、広島、山口	大路	20 疋
南海道	讃岐、阿波、伊予、紀伊、土佐、淡路	香川、徳島、愛媛、高知、三重県熊野地方、和歌山県、淡路島	小路	５疋
西海道	筑前、筑後、豊前、肥前、壱岐、豊後、日向、大隅、薩摩	福岡、佐賀、長崎、大分、宮崎、熊本、鹿児島	小路	５疋

４．南山城地域の主な遺跡

古代の官道については文献が少なく、敷設位置を特定できる道路遺構の発掘事例も部分的で、まだ大半が見つかっていません。その後も道路として利用され、現在の国道や水田、畑の下に埋もれていると考えられています。また、現在の道路や高速道路、鉄道が古道のルートと一致(踏襲)していたり、平行していることがあります。

発掘調査のほかに、道路痕跡を発見する手がかりとなるのは空中写真や衛星から得られる画像・データです。ソイルマーク(土壌跡)やクロップマーク(作物跡)に注目するだけでなく、最近では画像解析技術や地理情報システム(GIS)も駆使して、直線状の痕跡を探しています。こうした空と宇宙からの視点が、考古学にも欠かせない時代になっています。

南山城地域おいても、遺跡の発掘調査によって道路遺構が見つかったり、道路に関連する遺構が見つかっています。

①上人ケ平遺跡

所在地：木津川市州見台(旧市坂上人ヶ平)

時　期：弥生時代後期から奈良時代

概　要：奈良時代の瓦工房は近接する市坂瓦窯跡と一体のものと考えられ、平城宮大膳職（だいぜんしき/おおかしわでのつかさ）などに瓦を供給していたことが明らかになっています。陸路で奈良山を越え、瓦を運搬していたと考えられます。

②上津遺跡

所在地：木津川市木津宮ノ裏ほか

時　期：奈良時代から平安時代

概　要：木津川南岸に設けられた平城京の外港「泉津」に置かれた官の施設と考えられています。奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物群や区画溝などが見つかりました。

平城京などの造営には、大量の木材などの物資が必要でした。近江国の田上山などで伐採された木材は瀬田川（宇治川）を下り、巨椋池から泉川（木津川）を遡上させて「泉津」に集められ、そこから奈良山をこえて奈良盆地へと運ばれました。また、大量消費地である都城を維持するために様々な物資が集積していたと考えられます。

③樋ノ口遺跡

所在地：木津川市相楽城西・大徳ほか、一部精華町

時　期：奈良時代後から平安時代初期

概　要：木津川市と相楽郡精華町にまたがる遺跡で、須恵器・土師器・瓦・施釉陶器（三彩・二彩・緑釉など）とともに瓦葺の築地・掘立柱建物群・溝などが見つかりました。遺跡の性格については、離宮とする説や「山田寺」と解釈するなどがあります。一般集落とは考えられず平城京の北西側に位置する重要な遺跡です。

④三山木遺跡

所在地：京田辺市三山木柳ケ町ほか

時　期：弥生時代から中世

概　要：見つかった掘立柱建物群や柱列は一定の角度（規制）を持って配列されているようです。近隣には古代山陽道（山陰併用道）が推定されており、それに沿って区画整備が行われていたと考えられます。さらに、官道に設置される駅家の「山本駅」が現在の近鉄・ＪＲ三山木駅周辺に想定されています。現時点では「山本駅」を示す明確な遺物・遺構は確認されていませんが、

重要な遺跡のひとつです。また、北に隣接する二又遺跡も重要な遺跡です。

◎『続日本紀』和銅４(711)年に「山本駅」が設置された記述があります。

「始置都亭駅、山背国相楽郡岡田駅、綴喜郡山本駅、河内国交野郡楠葉駅、摂津国嶋上郡大原駅、嶋下郡殖村駅、伊賀郡阿閇郡新家駅」

⑤興戸遺跡

所在地：京田辺市興戸

時　期：縄文時代晩期から中世

奈良時代では遺跡地内を通っていた想定される古代山陽道（山陰併用道）に関連するような区画や官衙が推定されるような建物群などの遺構や遺物が見つかっています。

概　要：奈良時代では山陰・山陽併用道（現在の府道に一致すると推定されています）が遺跡の中心を通り、その東西両側で多くの遺構が見つかっています。西側では、ほぼ正南北の方位を持ち、規格性が認められる掘立柱建物群が見つかり、綴喜郡衙とも目されています。東側では山陽道に併行または直交するような方位を持つ掘立柱建物、塀、柵列、溝や井戸などが見つかりました。遺物では墨書土器や土馬・斎串、二彩陶器など出土し、この時期の官衙的な性格がうかがえます。平安時代では当時高級品と考えられていた緑釉陶器や灰釉陶器が多く出土しており注目されます。

⑥内里八丁遺跡

所在地：八幡市内里・上奈良ほか

時　期：弥生時代から中世

概　要：奈良時代末頃に設けられた２条の溝が北西から南東方向に延びています。２条の溝の間隔は12mで、後述する芝山遺跡で見つかった北陸・東山道の側溝と考えられる溝と、ほぼ同じ規模です。９世紀中頃には幅員が５～６ｍに縮小され、10世紀頃まで存続していたようです。歴史地理学者の足利健亮氏が復元された古代山陽・山陰併用道の推定路線付近に位置することも重要な点です。

⑦正道官衙遺跡

所在地：城陽市寺田正道

時　期：古墳時代から奈良時代

概　要：奈良時代の郡衙（役所）中心部分と推定される整然と配置された大型の掘立柱建物群が見つかりました。この官衙遺構は、建物配置や出土遺物などから、

奈良時代の山城国久世郡の郡衙中心部であると推定されています。

⑧芝山遺跡

所在地：城陽市寺田南中芝ほか

時　期：古墳時代から奈良時代にかけての複合遺跡です。

概　要：南東から北西に並行して延びる奈良時代の溝が３条見つかっており、官道の北陸･東山併用道の側溝と考えられています。溝と溝の間は12mと9.7mで、他地域で確認されている初期と改修時の東山道の道幅と一致するようです。

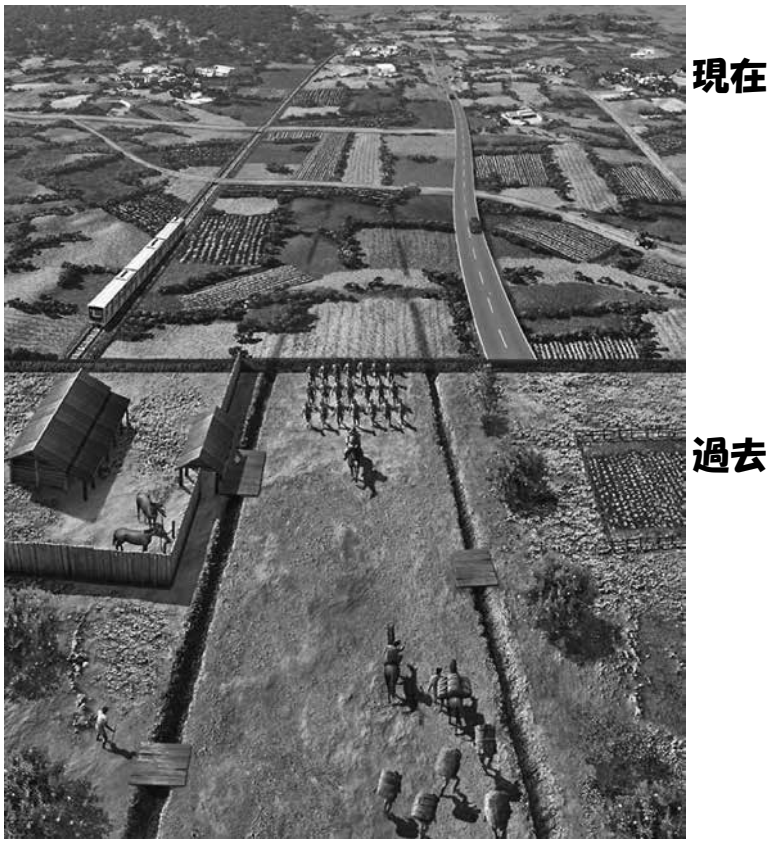
この推定北陸・東山道の西側に隣接して、奈良時代前半頃の掘立柱建物群が見つかっています。東西棟の３間（げん）×７間の建物が中心建物とみられ、その周囲に大型の掘立柱建物が正方位に沿って整然と配置されています。このような建物群は、官衙的な性格を持つものと考えられます。また倉とみられる総柱建物もあります。出土遺物も瓦や磚（せん）・土馬・斎串など、官衙遺跡で出土するような遺物が出土しています。

◎現在、遺跡の南東側に隣接する丘陵に小字「鷺坂山（さぎさかやま）」の地名が残っています。『万葉集』の雑歌に「たくひれの　鷺坂山の　白つつじ　我はにほはね　妹に示さむ（巻九　1694）」など、「鷺坂山」を詠んだ歌が残っています。

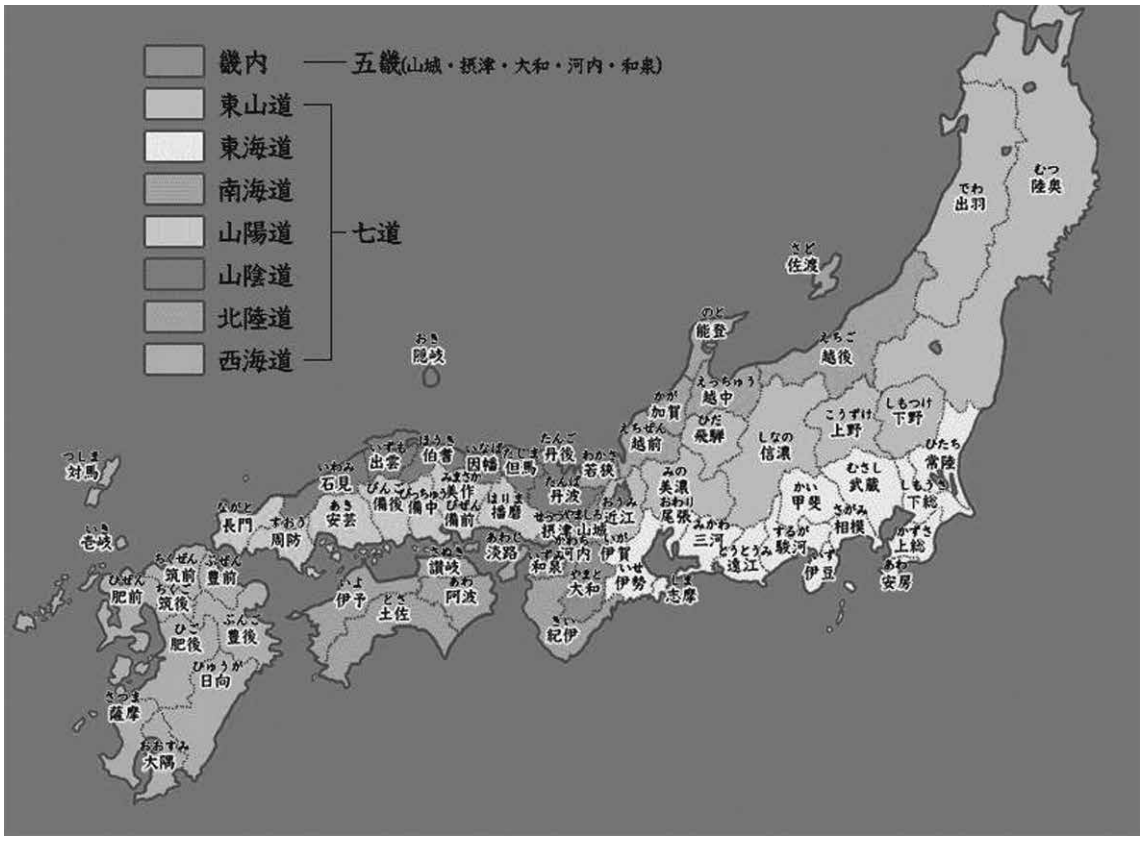
この道路の一部は現在でも奈良街道として受け継がれています。

５．おわりに

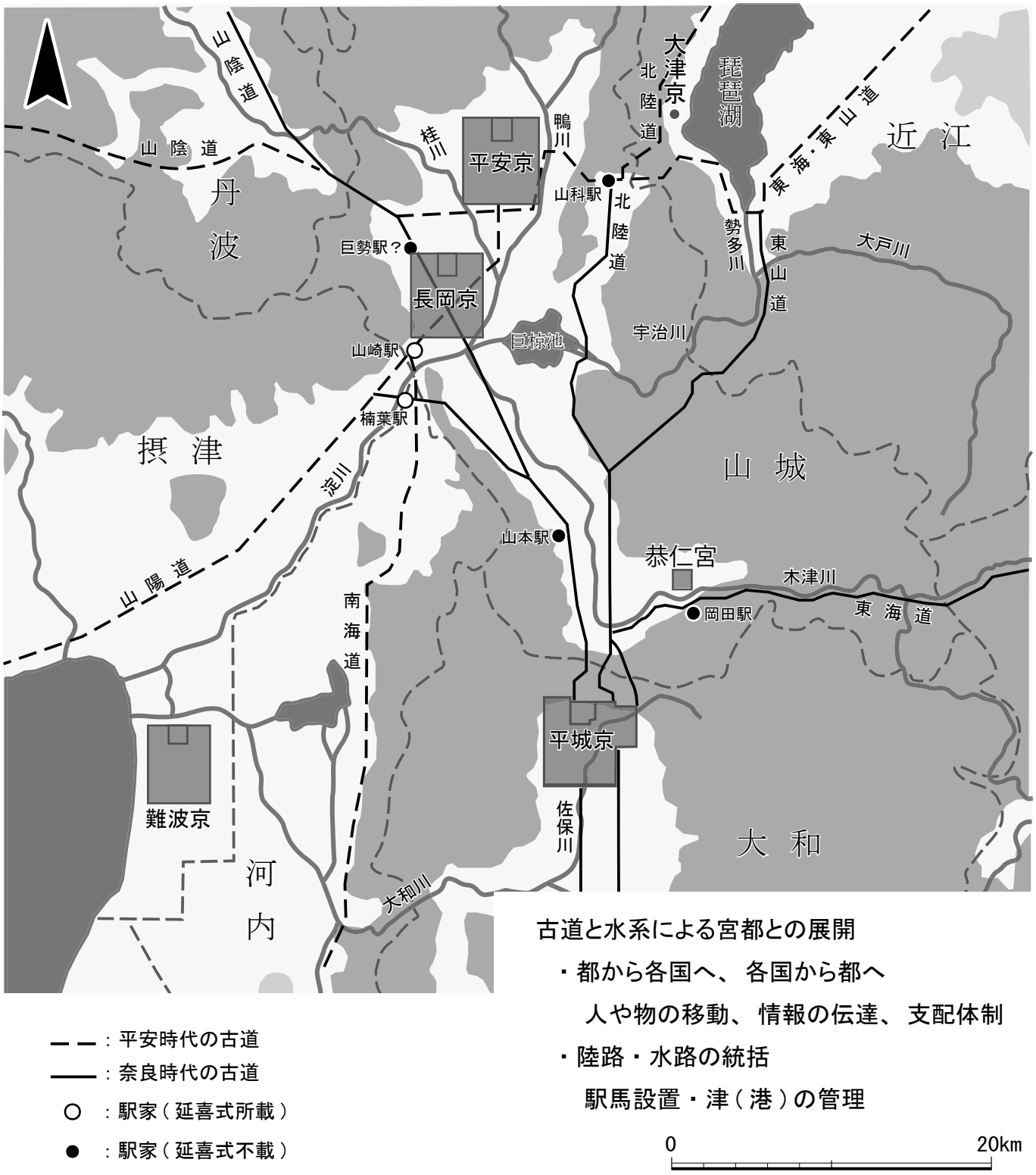
南山城地域は、古代から近世に至るまで、交通手段として木津川や淀川の水路の利用が高まるとともに、陸路として山陽道などの官道などの道路が整備されました。平城京や平安京などの都城、畿内や七道の諸国へ通じる人や物資の移動、情報伝達の手段として使用されていました。山城国は交通の要衝として重要な役割を担っていたと考えます。それに伴い、官道沿いや津（港）周辺には拠点となる官衙施設や集落、寺院などが設置・整備されていったと想像できます。



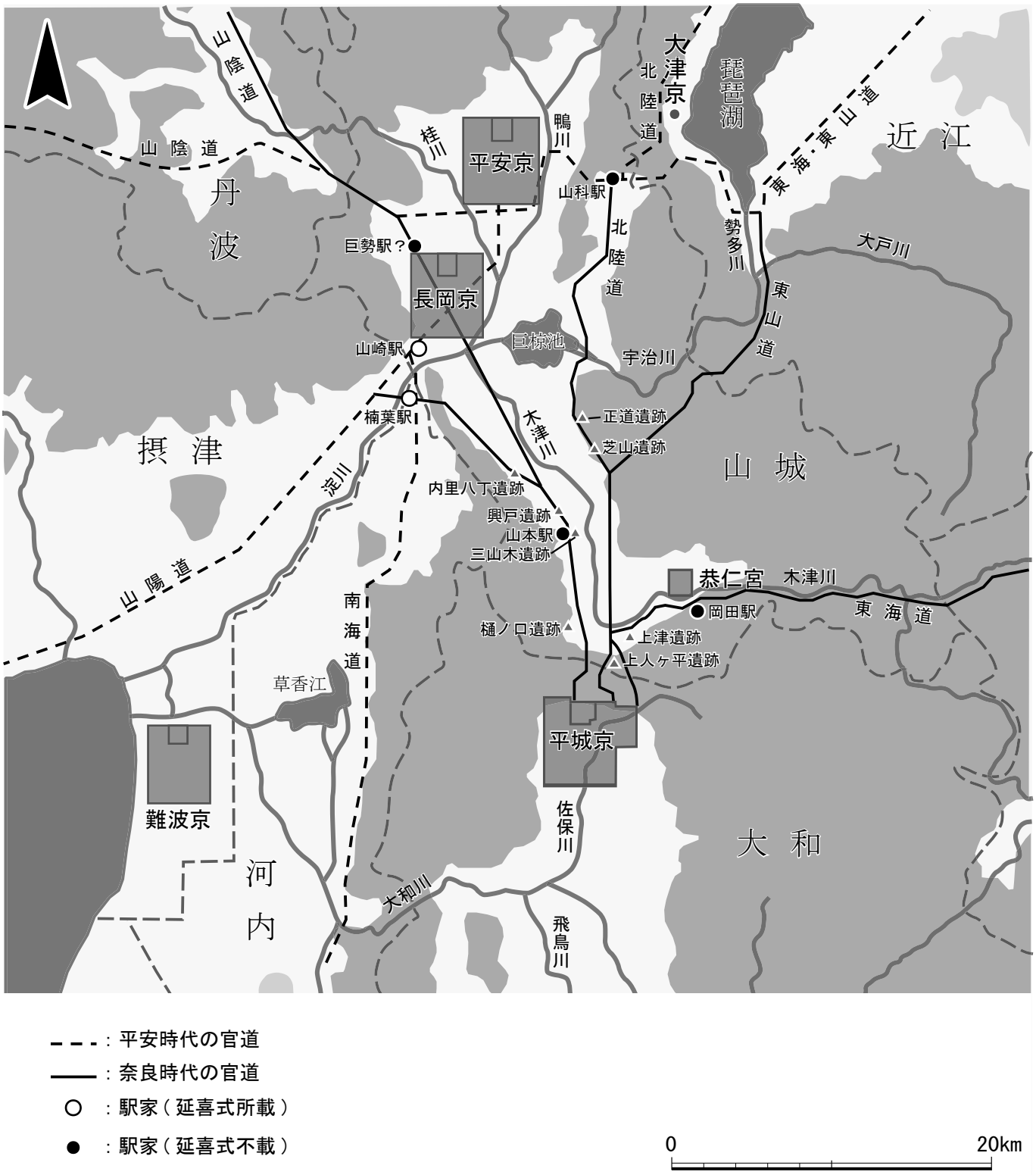
第１図　古代の道路　イメージ図 「國學院大學メディアより」



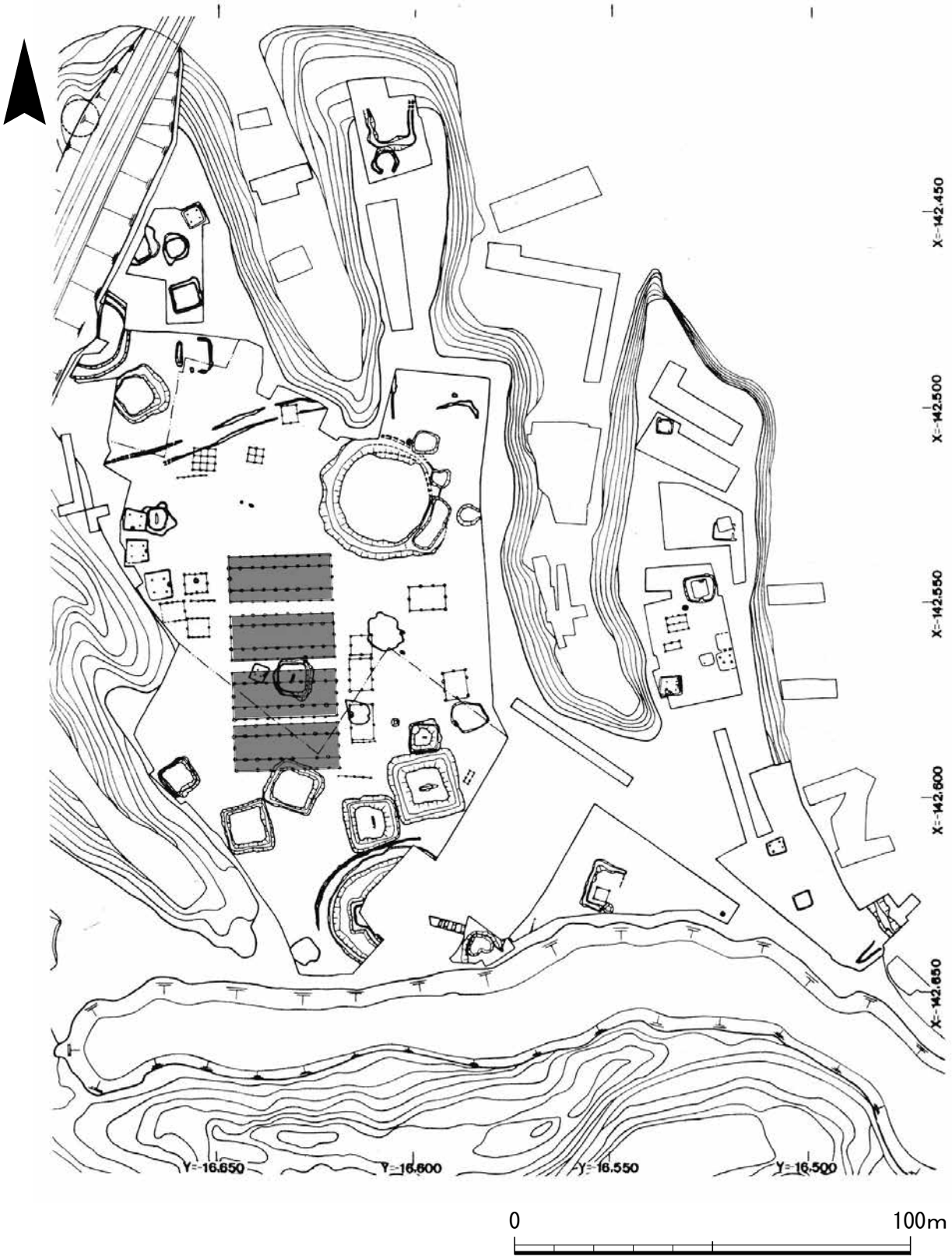
第２図　五畿(畿内)七道



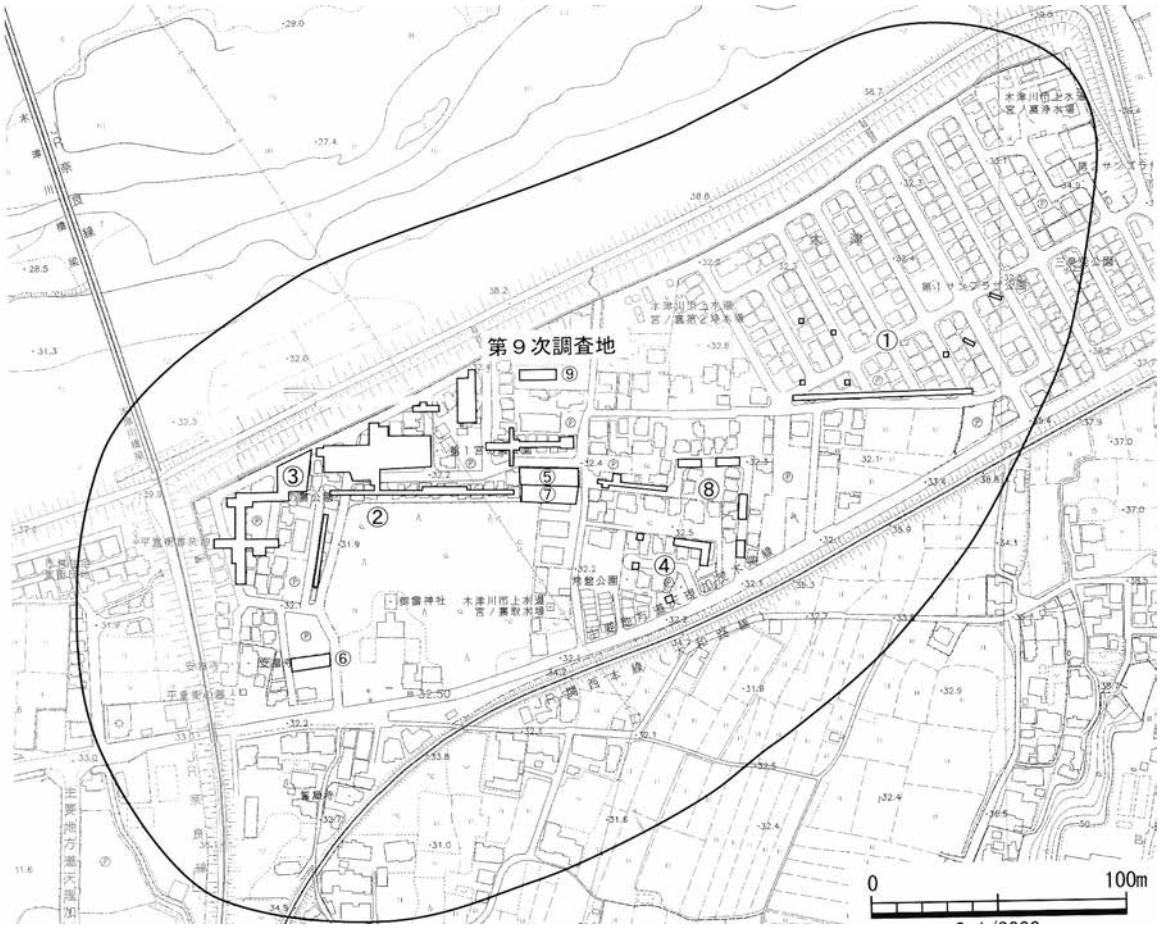
第３図　山背国周辺の古代の官道（交通網）



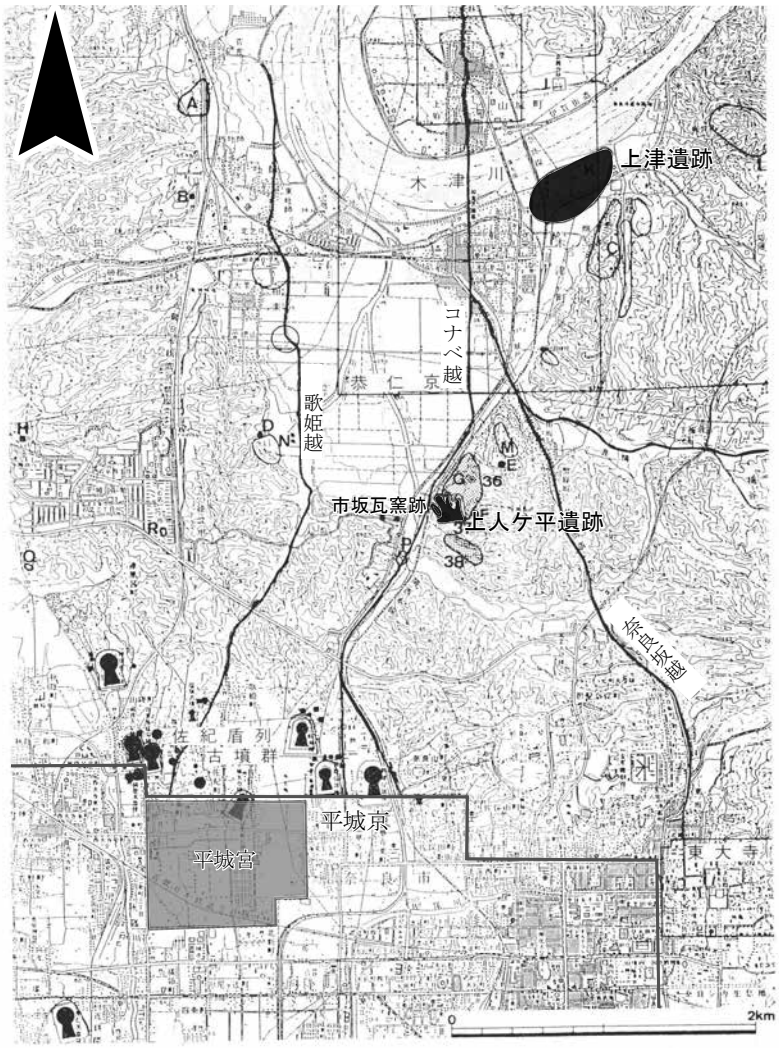
第４図　古代の官道と木津川沿いの主な遺跡



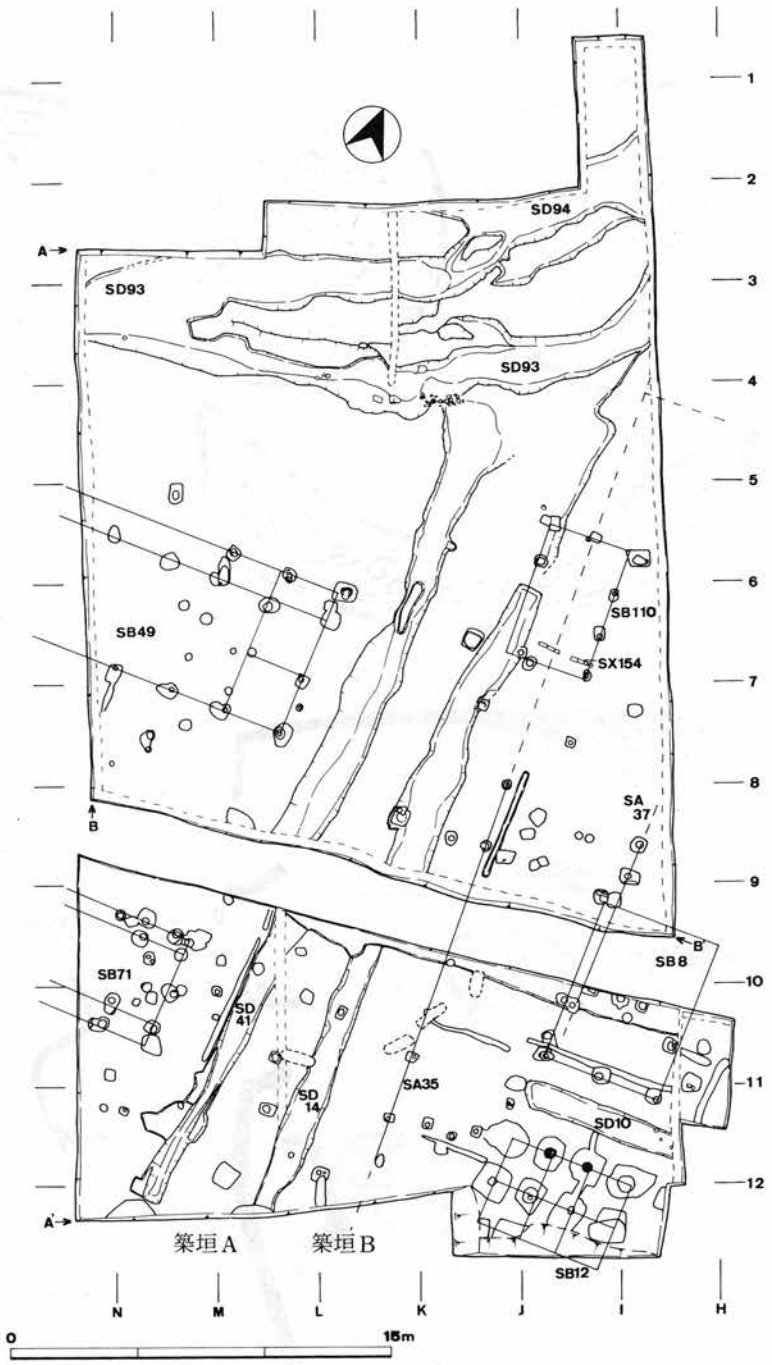
第５図　上人ケ平遺跡の工房跡（掘立柱建物）



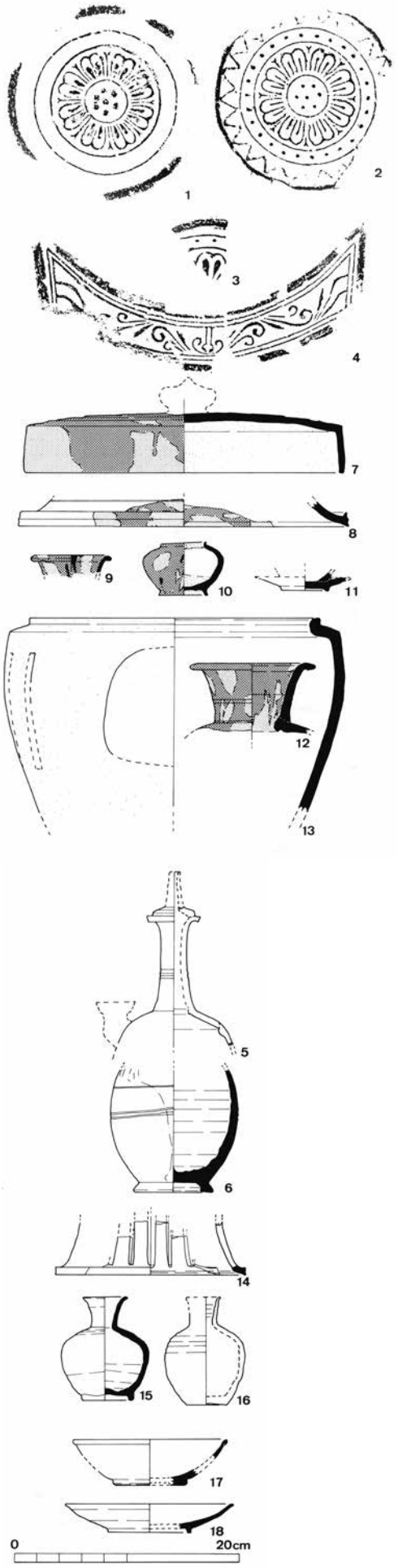
第６図　上津遺跡範囲と調査地区



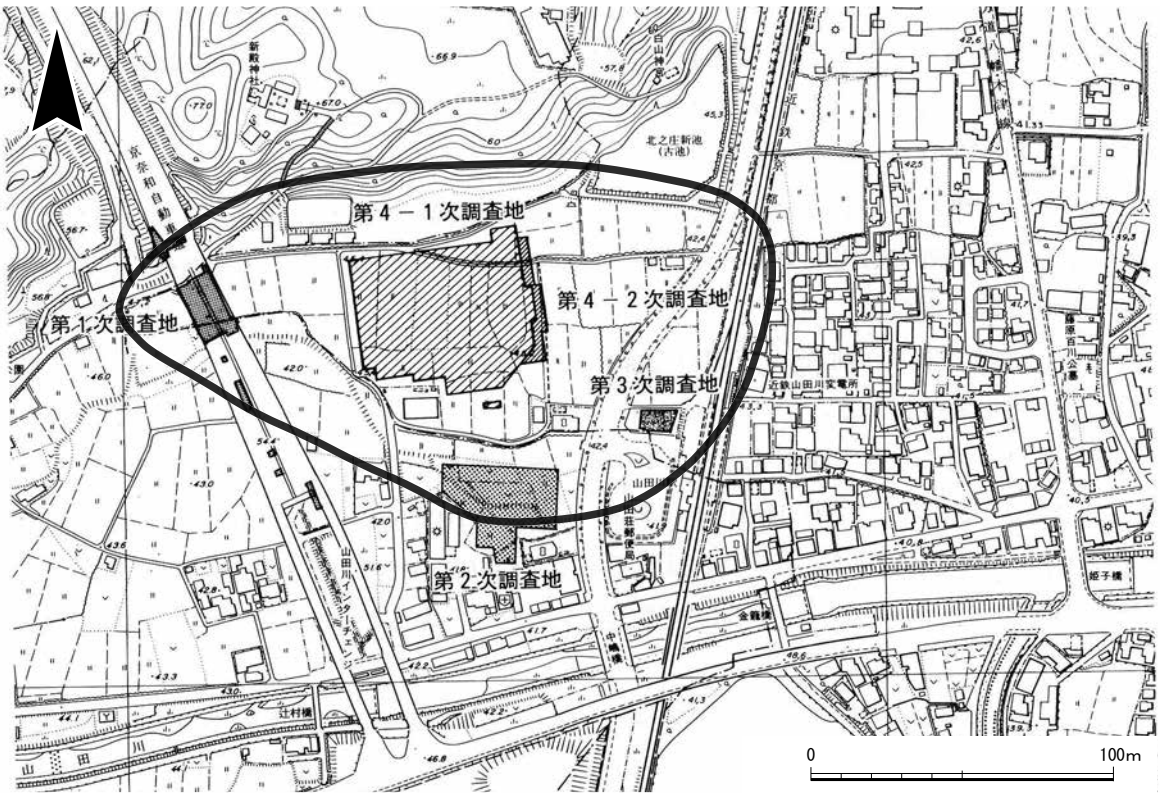
第７図　平城京と（山背）奈良山を越えるルート



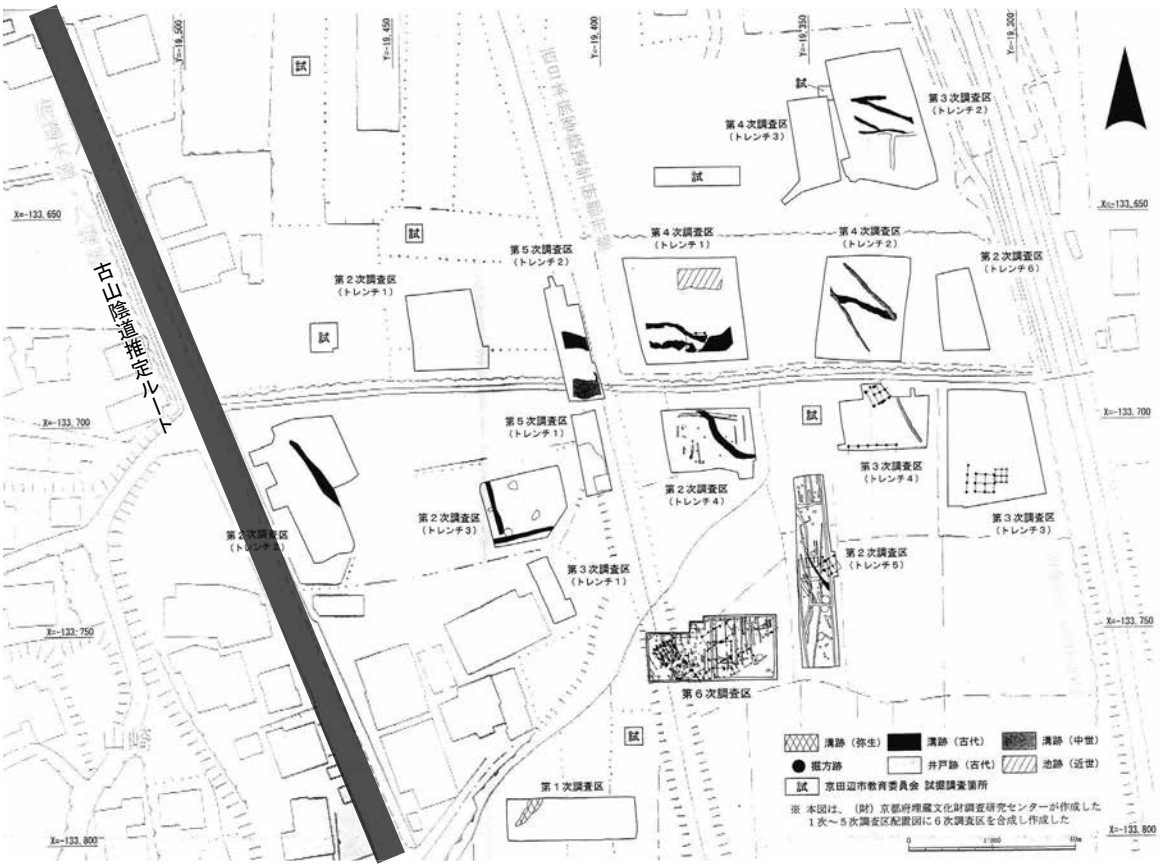
第８図　樋ノ口遺跡第１次調査遺構置図



第９図　樋ノ口遺跡第１次主な出土遺物

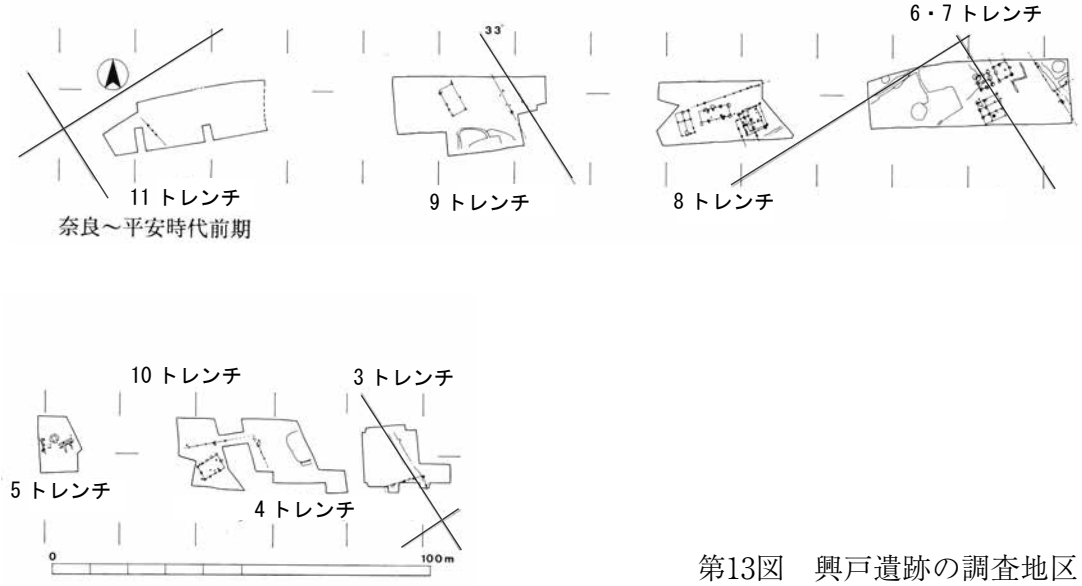


第10図　樋ノ口遺跡調査区配置図(木津町報告書第13集より加筆)

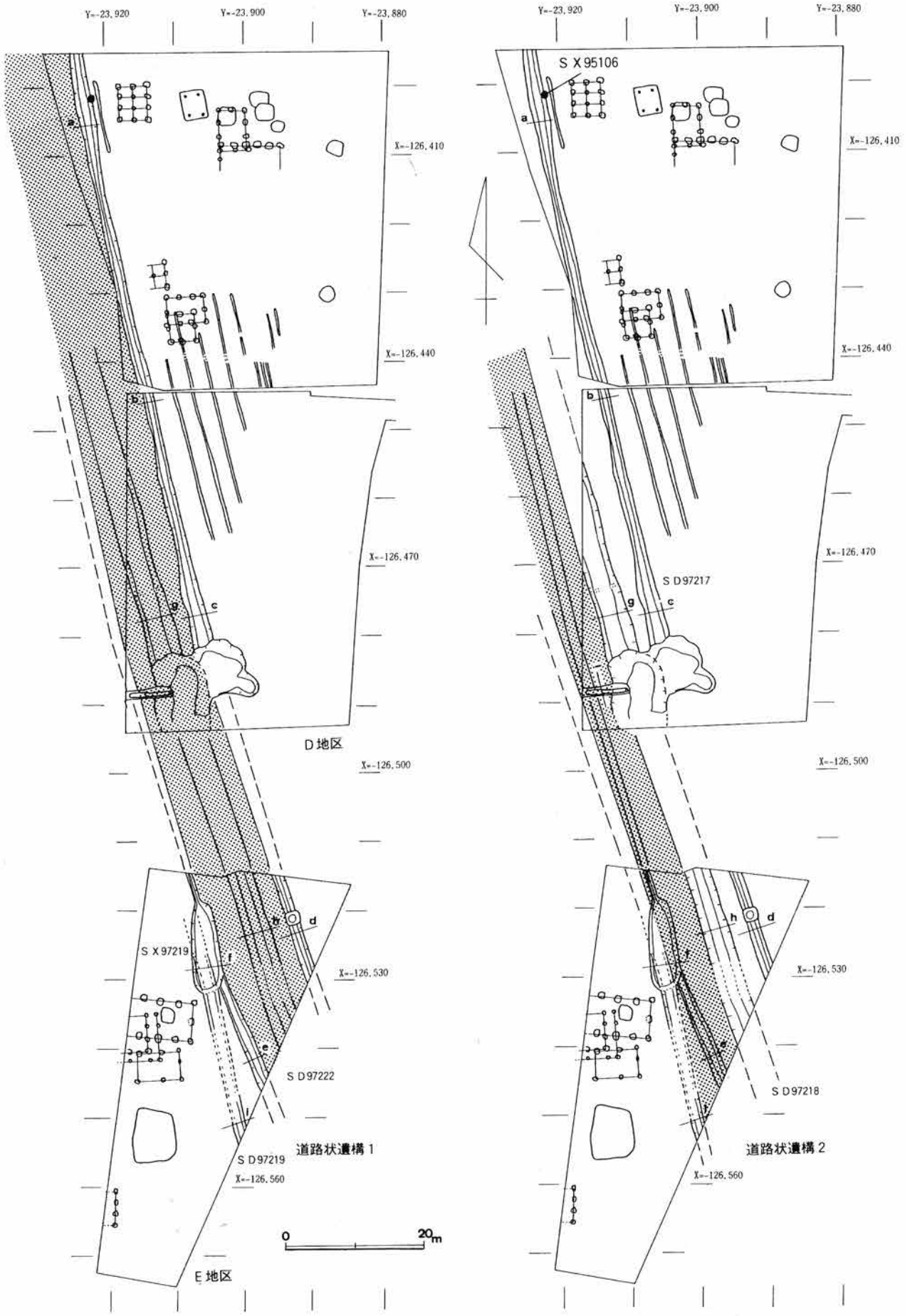


第11図　三山木遺跡調査区配置図(第６次調査報告書より加筆)

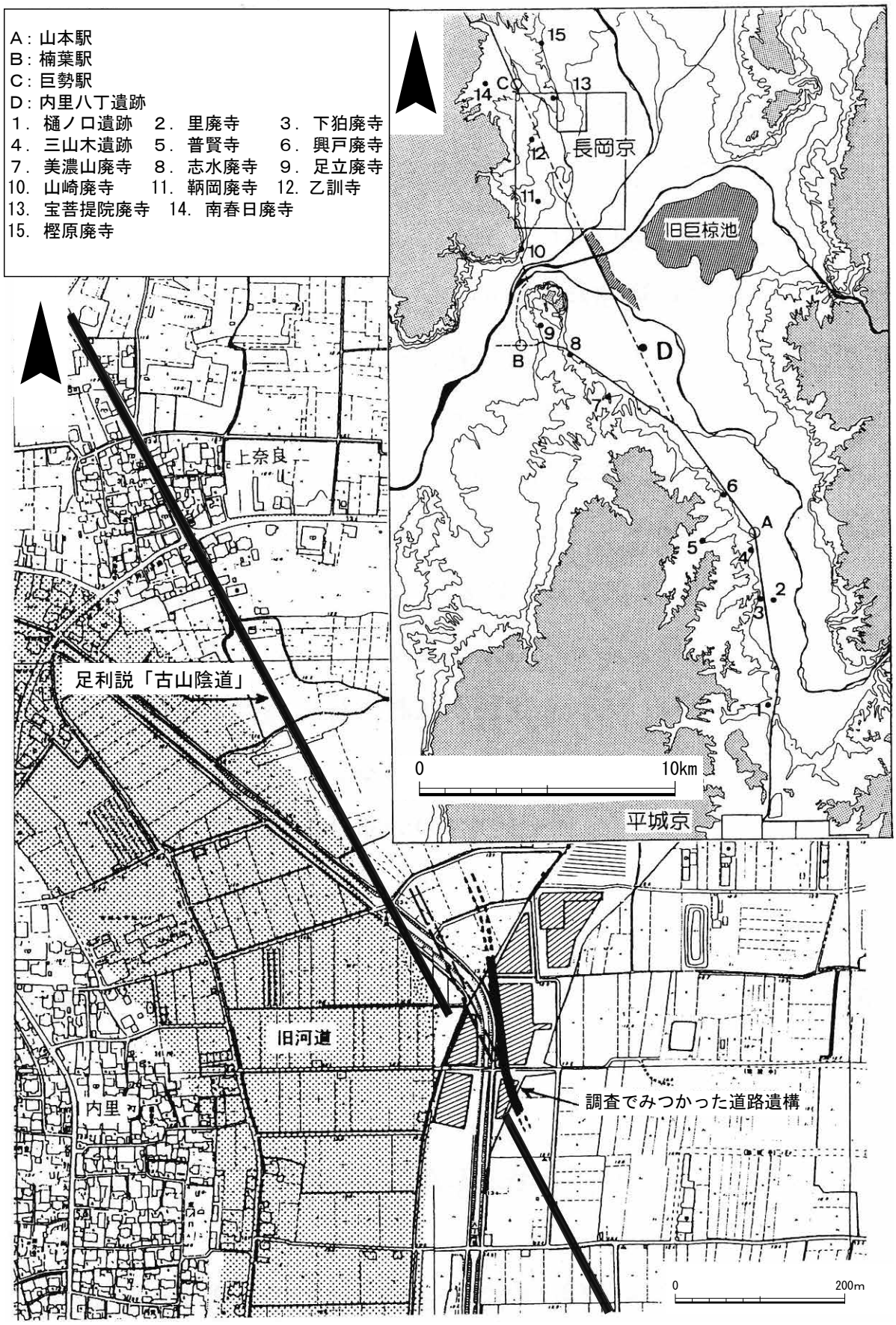
第12図　興戸遺跡と古山陰道推定ルート



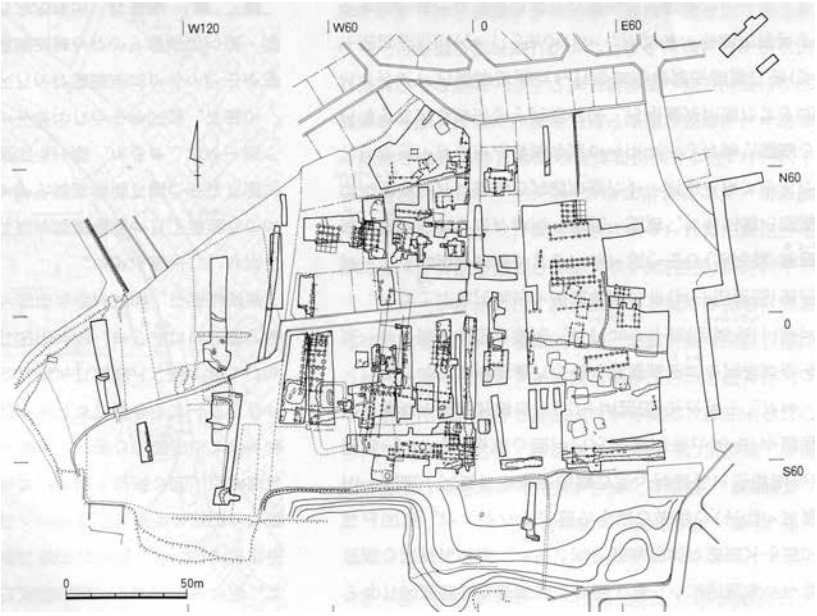
第13図　興戸遺跡の調査地区



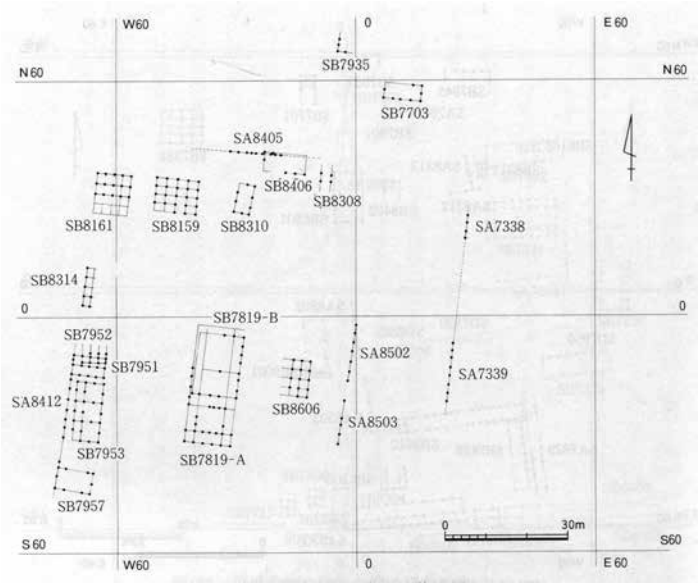
第14図　内里八丁遺跡の道路遺構（奈良時代から平安時代）



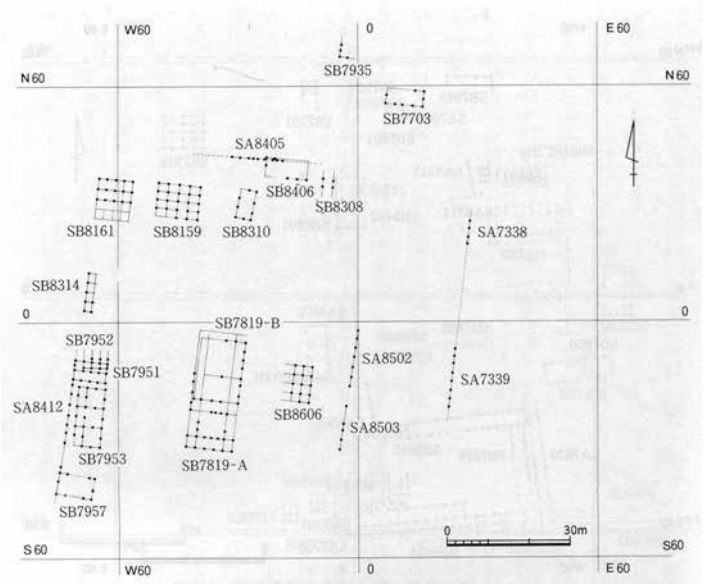
第15図　足利説「古山陰道」と内里八丁遺跡の道路遺構



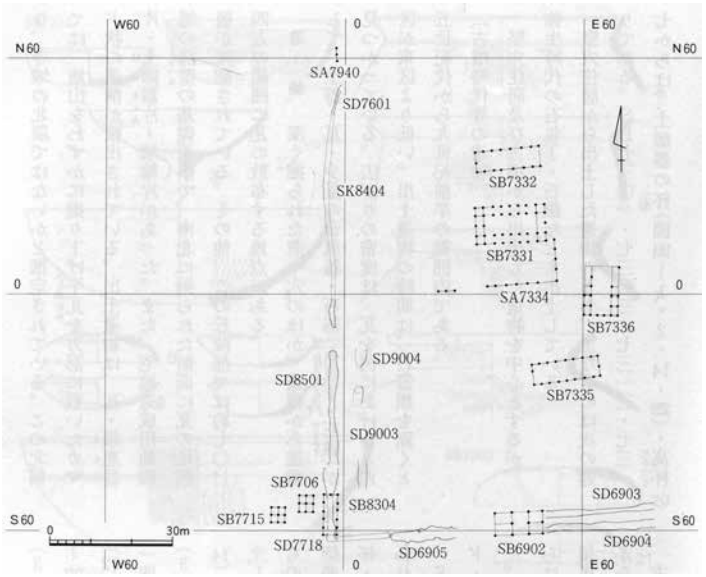
第16図　正道遺跡（正道官衙遺跡）遺構配置図



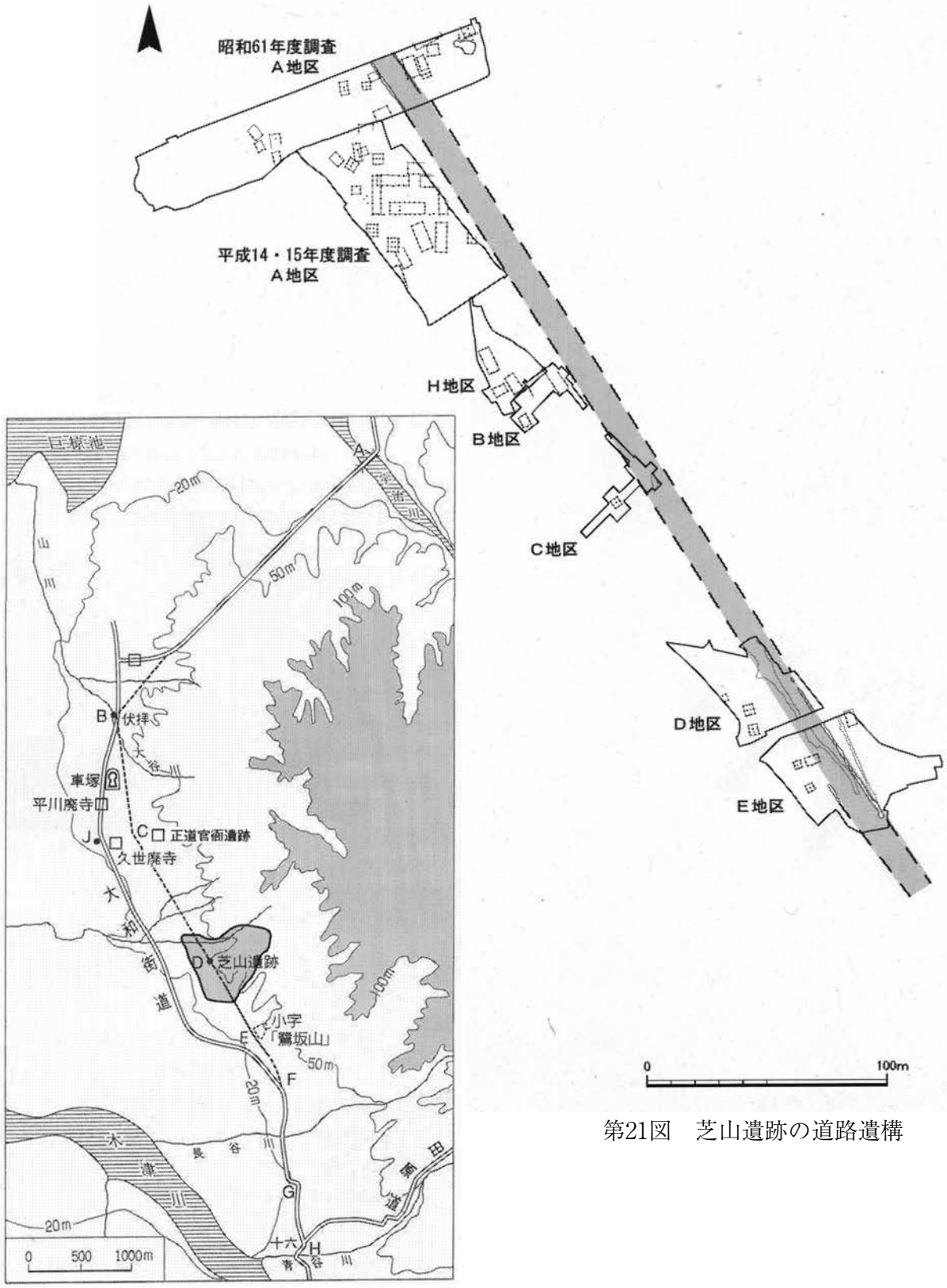
第17図　正道遺跡官衙Ⅰ期建物配置（７世紀後半）



第18図　正道遺跡官衙Ⅱ期建物配置
（７世紀末から８世紀初め）



第19図　正道遺跡官衙Ⅲ期建物配置
（８世紀初めから９世紀前半）



第21図　芝山遺跡の道路遺構

第20図　城陽市周辺の遺跡と奈良時代の道路

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、成果展などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

http://www.kyotofu-maibun.or.jp
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒 617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内 40 番の 3
Tel （075） 933-3877（代表）　Fax （075） 922-1189